

ざる教會は見るべき教會として現はるべき者なるを、然るに舊教會との關係は既に絶えたるが故に、或は始めより關係なかりしと曰ふを得べし、又使徒等が純然たる新教會を組織する事は、自然一種特別の意義を有せしが故に、彼等は非常なる興味を以て之に従事したりき、顧みるに耶蘇は其訓言若くは譬喩を語るに當り、一切外形上の事に拘泥せず、唯だ其真髓を擧げしのみありき、彼は如何にして又如何なる形にて種子が生へ出づべきやに付ては敢て心を用ざりき、其眼中には在來の制度を有するイスラエル國民ありて、彼は其外形までも變更せんとは思はざりき、然るに今や在來の制度との關係は断たれたるなり、如何なる宗教運動も其形骸なくしては永存する者にあらず、必らずや團體的生活と團體的禮拜に適する一定の形式なかるべからず、然るに斯かる形式は一舉にして成る者に非ず、一部は時と場合の必要に應じて徐々に造られ、一部は外部の境遇及び現存せる關係より來るべし、異邦的基督教の團體は斯の如くして一の有機體となり、目に見ゆる形式を有するに至りぬ、其形式や一は在來の事情に關係なくして徐々に生じ、一は在來の事情に基きて即時に成りたる者なり、形式は素より形式に過ぎざれども、形式にも亦特別の價值を附せらるゝを常とす。

元來此形式たるや團體を維持する手段なるが故に、此手段に對する目的物が有する價值は知らず、此形式にも移り行く者なり、少なくとも斯かる危險を有する者なり、然るに茲に此危險を生せしむる一層強き事情あり、他なし人間内部の生活は、之を監督する事困難なるも、外形上の規定は之を監督勵行する事の容易なる事是なり。

一旦猶太の國教會と絶縁したる使徒等が、今や之と對立して新教會を造るは勢ひ已むを得ざりし所なり、彼等は眞のイスラエルと信じたる教會を設立するに、何處までも基督教的運動の自覺と力を現したりき、然るに一たび地上の教會の設立を見るや、未だ感せしとなき新興味は沸然として湧きぬ、是に於てか彼等は真髓に加ふるに形骸を以てし、律法規律を送り、禮拜と教理の規定を設け、彼等固有の論理法によりて夫れゝの價值を附したるが、茲に至れば人間の高下は最早心靈上の評價にのみ由りて判せらるゝ者に非ず、宗教は知らず、無數の見えざる組織によつて、歴史的組織と相結合するに至りぬ。

第二教師としてのポロの使命は、殊に彼の基督論にありとは余輩が已に述べたる所なり、ポロ以爲へらく贖罪は已に成就し、救済は現在の力たりと、此思想は十



字架上の死と復活とに關する説明を貫き、又「主は即ち靈なり」(哥後三)との方程式の中にも含まれぬ、曰く「神は基督により我儕をして己と和がしむ」(哥後五)曰く「人、基督に在る時は新に造られたる者なり」(哥後七)曰く「基督の愛より我儕を離らせん者は誰ぞや」(羅一五)と。此に由りて基督教の絶對的性質は明瞭となりぬ。然るに斯かる公式的斷定は一定の論理法を有すると同時に、それが固有の危険を有する者なるが、茲に使徒ポロ自ら拒がざるべからざる一の危険を有したり。即ち心は未だ新生活に入らざるに、罪の贖はれん事を求むる者、ポロの教を受けたる者の中より起りし事はあり、耶蘇の教訓には斯かる危険の生ずる憂なかりしかど、ポロの公式的斷定に至りては、斯の如く安全なるを得ざりき。近代に於てこそ罪を悪まず基督に倣はざる者は贖罪と罪の赦と、義とせらるゝ事とを望むべきに非ずとは、眞面目なる説教者が異口同音に唱ふる所の題目なれ、教會歴史の上において内心未だ新生活に入らずとも、我罪は贖はるゝを得べしとの通俗的教理が只ならぬ誘惑となり、全人類に宗教の眞義を隠したる事を誰か承認せざる者あらん。耶蘇は贖罪に付て曾て此の如く教えたる事なかりしに、今や此觀念は人の陥るべき窠とはなりたり。基督教が贖罪の宗教たるは勿論なれども、此處周到なる注意を要する所にし

て、吾人は贖罪の觀念をして個人的經驗及び心の革新以外に立たしめざるを要す。然るに之と密接の關係を有する第二の危険あり。若し贖罪は基督の性格と事業とに關係する者なりとせば、吾人は第一に彼の性格と其事業とに付て正當ある知識を有するの必要あり。是に於てか、基督に關する正當教理は稱もすれば中心點に進み來り、福音の尊嚴と平易とを倒さんとせり。斯かる危険も、耶蘇の教訓の中には起るの憂なかりき。吾人は已に約翰傳の中には「若し爾曹我を愛するからば我が誠を守れ」(約十五)の句あるを見る。然れどもポロが了解したる宗教上の教理に至りては、斯かる危険を有せしのみならず、實際人をして此危険に陥らしめたり。耶蘇の性格は如何、彼は如何なる肉體を有したるや、教會が斯かる問題の解決を以て最大事件なりと教えたるは遠き以後の事にては非りき。ポロ自らは流石に斯かる思想を有せず、基督を主と呼ぶ者は聖靈によりて語るものなるを信したれども、彼が頭腦より出でたる宗教的觀念の組織は、紛らふ事なく面白からぬ方向に働きたり、基督論を以て福音の本領と爲す事は、或は吾人の理性に満足を與ふる事からんも、已に福音の精神に外づれたる者なることは、耶蘇の教訓に照らして明かなり。夫れ耶蘇の教訓たるや根本問題を確立し、迂路に由らず、直接に各個人をして神



と對坐せしむる者たり。さればとて此事たるポーロが十字架に死せる基督の教訓を中心と爲し、萬事を之によりて一括せんと爲したる事と矛盾する者に非ず何となれば彼は之に由りて神の力と知慧とを示し、又基督を愛する事により神を愛するの情を燃したればなり。現今にても同一の仕方にて基督教の信仰を傳播する者幾何なるを知らず。然りと雖も基督の性格に關する公式的斷定に向て、人の同意を要求するが如きは全く別問題なりとす。

然れども尙茲に考ふべき點あり。ポーロはメシヤ的教理に導かれ、又基督より得たる印象に支配せられて、茲に神は基督の中に在りしのみならず、基督は一種天來の性質を有したりとの思想に達したりき。此思想たる猶太人に取りては在來のメシヤ的思想を破壊する者に非ざるも、希臘人の爲めには全く斬新の説にてありき。希臘人は基督の顯現、即ち聖なる存在者が世界に入來せりとの事實を以て最大要點となし、贖罪の事實は之のみにて充分ありと思へり。されどポーロは斯の如く考へざりき。彼は十字架の死と復活とを以て根本的事實となし、基督降臨の如きは唯だ道德上の立場より人間行爲の模範と見るべき者となせり。基督は我儕の爲に貧しき者となり、謙遜にして凡の者を捨てたればなり。然れども此思想は永續する能は

ざりき。蓋し贖罪の事實たる餘りに大にして、永く第二位に立つ能はざりしなり。然るに之を第一位に入るゝや、福音の意義と興味とを奪ひ、福音其者を危くせんとせり。基督教教理の歴史を讀む者誰か這般の事實を否定するを得んや。吾人は次回の講演に於て如何程の範圍内に此事の起りしやを見んとす。

第三、新教會に聖經ありき。舊約聖書はなり。ポーロは律法は既に用おしと教えながら、唯だ一の點に於て舊約聖書を保存せんとせり。嗚呼舊約聖書は教會に取りて何等の重寶なりしよ。教化の書として、慰安の書として、智慧の書として、事ある時の顧問として、又歴史の書として、舊約聖書は實に基督教的な生活と辨證學の爲に無上の寶庫にてありき。當時希臘羅馬の世界にありし宗教にして、孰れか果して斯の如き寶庫を有したる者乎。然るに此貴重なる寶庫は凡ての意義に於て有益なる者には非ざりき。何となれば

(甲) 舊約聖書の紙面には基督教以外の宗教及び基督教主義以外の道德ありたるが故なり。假令斯かる要素を靈的に解釋せんと試むるも、そが本來の意義を全く排除する能はざるべし。實に舊約聖書に由りて基督教の中に劣等腐朽の分子の侵入する恐ありしのみならず、終に其侵入する所となりしは事實なりき。此事實



たる唯だ細末の點に起りしのみならず、實に基督教全體の目的をも一變し、加ふるに基督教をして政治上の勢力、即ち國家と親密なる關係を結ばしむるに至りぬ。若し斯かる關係にして猶太教徒ならぬ他の國民との間に結ばれ、或は猶太の舊律法ならぬ他の類似の律法との間に結ばるゝに至らんか、如何なる珍事の起るとならん。若し又ポロの如き人物出で、舊約聖書の或律法は意義を變更するとにより、尙之を有効ならしむるを得べしと説かんか、其繼續者等が勝手に他の律法の意義を變じて、之をも神の命令なりと公言する者あるとも、誰か之を制限するを得る者あらんや。是に於て吾人は第二の理由に入る。

(乙) 舊約書の中より意味を制限して或思想を引出すことは、其自身に於ては敢て忌むべき事に非ざれども、他の方面に於ては基督教の自由を危くする者なり。獨り精神上の自由を危くするのみならず、教會を造るの自由、及び禮拜の方法、規律に關する自由をも危くする者たり。

以上余は基督教會が猶太教と分離したる後も、福音が被れる制限は尙已まらず、反て新制限を受くるに至りし事を示したり。此制限は基督教が正に必然的進歩を爲す

べかりし點、即ち舊約書の如き貴重なる所有物を持ちたる事に基けり。歴史上より曰へば假令一步たりども、宗教が純粹なる靈的生活の外に出づれば、如何なる進歩、如何なる成功、而して如何なる利益も、其暗黒の方面を有せざるはなかりき。使徒ポロ悲みて曰へり「我儕の知識全からず」(哥前<sup>九</sup>の<sup>三</sup>)と、世間萬事皆然り。何事を爲すにも必ず價を拂はざるべからず。一の目的を達せんとすれば、獨り惡き結果を身に受くるのみならず、知りつゝ、見つゝ、斷じて他の利益を捨てざるべからざるなり。最純最聖の者も若し靈的生活の外に出で、見るべき世界に足を染むれば、人は使用する所の形式の爲に束縛せらるゝとの原則に漏るゝ能はざるなり。

紀元六十四年、大使徒ポロがチロ帝の毒斧に斃れんとせし時、彼は數日前親友に與えたる書簡中の一節を語るを得しあり。曰く「我既に馳すべき途程を盡し、既に信仰の道を守れり」(提後<sup>四</sup>の<sup>七</sup>)と、嗚呼、彼か爲したる事業の偉大なること、曰ひ、又之を爲すに用ゐたる聖なる力と、曰ひ、如何なる傳道者も、説教家も、牧師も、彼には及ぶ能はざるべし。彼は生ける神の言葉によりて働き、以て靈火を燃したり。彼は人の父の如く人の靈魂の事を憂ひ、全心全力を傾けて之が爲に戦ひぬ。彼は一身を以て教師と



教育者と建設者とを兼ねたり見よ、彼が死を以て其事業を終りし時は、羅馬帝國中東はアンテオケより西は羅馬、西班牙に至るまで、已に基督教會の設立を見るに至りしなり、教會の中には所謂肉に於て強き者及び高位高官の人は、あざりしも、教會は尙世の光として存し、世界歴史の進歩を負ふて立ちたりき、信徒等は知識上の進歩尙幼稚なりしも、生ける神と永生とを信じ、人間靈魂の無限の價値を認め、又其價値は見えざる者に關する事を知りぬ、彼等は心を清ふして兄弟の交を爲せり、少くとも斯く爲さんと勉めたりき、彼等は其主耶穌基督によりて他の國民と相結合するを得て、高尚ある意識に達したりき、以て爲らく猶太人と希臘人、希臘人と野蠻人の別なく、皆己等によりて、一となり、以て人類歴史の最終最高の階段に達するを得べしと。

第十一回

余輩は已に使徒時代を論じ終れり、其大要に曰く福音は使徒時代に於て猶太教の本國を辭し、廣漠たる希臘羅馬の世界に出でたるが、主として此大事業を完成し、之に由りて基督教を世界歴史の活舞臺に投じたる人傑を使徒ポロとなす、斯くて

基督教が新たなる關係を結びし事は、此宗教の爲に何等の障害ともならざるのみか、却て之が爲に基督教は人類當時は羅馬帝國に限られたるの間に實現する事となりぬ、之と同時に他方には新形式を生じ來り、基督教は再び制限と束縛とを受くるに至れり、此點に關しては次に掲ぐる所の題目の下に一層詳論する所あらんとす。

加特力教に至る迄の基督教

福音は原と律法的宗教として打て出でたる者に非ざれば、智力上、社會上の必要より福音の周圍に造られたる形式は、最古の者と雖も、一として經典的、永久的特質を有する者は、あらず、世の歴史家にして使徒時代以降數百年間に亘れる基督教變遷の跡を尋ねんとする者は、常に此點を記憶せん事を要す、基督教は現世と未來生と死、勤勉と通世理性と狂喜、猶太教と希臘主義等の對立的關係に超然たる者あれば、甚だしく異なる事情の下にも生存するを得るなり、此事たる基督教が本と猶太教の廢墟の中より猛然蹶起したる事に由りても知るを得べし、否若し基督教が眞に生ける宗教、又生ける者の宗教と爲らんと欲せば、必ずや斯の如くならざる可らざるなり、基督教は福音としては唯だ一の目的を有す、即ち人々が生ける神を發見し



之を以て己が神とあし、之より力と悦と平和とを得る事是なり。然らば基督教は數世紀の間、如何なる路を辿りて此目的を達せしや、猶太主義に由りしか將た希臘主義なりしか、遁世的なりしか將た文明的なりしか、諾斯土教クリスチヤニズムとなりしか將た不可知論アノミチズムとありしか、組織的教會を造りしや將た自由同盟を造りしや、其他基督教は如何なる外皮の中に保たれしや、斯の如きは凡て至重の問題に非ず、皆變化すべき者、一の世紀に屬する者、世紀と共に來り世紀と共に往く者にてあるなり。

紀元第二世紀、即ち余輩が今觀察せんとする時期に當り、新宗教が未だ曾て經驗せざりし程の大革新は起りぬ。此革新たるパレスチナの教會衰頹して異教的基督教會の勃興せし事よりも更に大なる者たりしが如し。

余輩は今、足を紀元二百年、即ち使徒時代以後百年乃至二百年の間に留めて基督教を觀察せんとす、使徒時代終りて僅に三四代、當時の基督教果して如何なる觀をか呈したる。

先づ見るべきは教會的政治的、一大團體の存せし事なり、之と並んで多數の宗派ありて各々自ら基督教徒と呼べるも、教會は之を承認せずして烈しく彼等に抵抗せり。かの教會的政治的大團體は各教會の聯合より成り、羅馬全帝國に亘れる一大團

結として現出せる者なり。此組織に於て各個教會は自主獨立の教會たるも、皆大體に於て同様の組織を有し、同一の教理上の規定と嚴然たる規則とによりて互に相聯合せり。教理上の規定は一見廣きに亘り居らざるが如きも、各條包括する所の意義は極めて濶大なり。形而上學の問題もあれば宇宙論の問題もあり、又歴史上の問題もありて、之に對する一定の解答を與へ、天地創造より未來生活の狀態に至るまで人類の全發達を其中に解釋せり。而かも人間の生涯に關する耶蘇の命令の如きは其中に存せざるなり。此命令は規律に關する者として、信仰上の規則と明かに區別せられたり。而して各教會は莊重なる儀式によりて神を敬ふ禮拜上の組織にてありき。此組織の特色として、已に僧侶と俗人の區別を生じ、禮拜の中にも僧侶ならでは爲すまじき事ありて、僧侶の媒介は絶對的に必要なりき。兎にも角にも人は媒介なくては神に近くべからざりき。或は正當なる教理の媒介、或は正當なる制度の媒介、或は聖書の媒介を要したりき。茲に至りて在來の生ける信仰は信仰箇條と變じ、基督に對する敬虔は基督論に、神國に對する燃ゆるが如き希望は靈魂不滅論と化神論に、豫言は聖書註解と神學的知識に、牧者は法教師に、而して兄弟は後見者を持つる俗人と變じ、奇蹟及び病を癒す事は或は消滅し、或は僧侶等の技術と化し、熱き



新は儀式的讚美歌及び祈禱文となり、聖靈は律法と強迫とに變じたり。斯くて、各信徒は燃ゆるが如き疑問を以て世俗的世界の中に立ちぬ。其疑問に曰く、我は基督信徒としての地位を失はざる限り、如何ばかり身を俗界に沈むるを得るや。使徒時代後僅々百二十年の間に斯の如き大變革は起りたるあり。是に於て余輩は第一に斯かる大變革の起りし所以を尋ね、第二に此變革の中に在りて福音は尙其本領を維持するを得たるや、又如何にして之を維持したるやを討究せんとす。

此二問題に答ふるに先ち、史家たる者の等閑に附すべからざる點に付て一言せんとす。凡そ歴史上の一大現象若くは一大生産物の眞價及び眞義を論定せんとする者は第一に其爲したる事業、換言すれば、それが解釋したる問題を尋ねざる可らず。各個人は人が己を判斷するに此徳、彼不徳、此長所、彼短所に由る事なく、己が成したる事業に由らんことを要求するを得るが如く、歴史上の大建物、大國家、大教會も亦第一に否、寧ろ絶對的に其事業によりて評價せらるべきなり。然り、事業は評價の唯一の標準たるなり。若し他の標準より評價せんと欲せば吾人の判斷は曖昧模糊、忽ち樂天にして忽ち厭世とあり、一個の歴史的冗談に終らざるを得ざるべし。されば今

發達し來りたる加特力教會を觀察するに當りても、吾人は先づそれが解釋したる問題の如何、それが爲したる事業の如何を尋ねざるべからず。吾人は加特力教會の事業として左の二點を擧ぐべし。

- (甲) 自然崇拜、多神教、及び政治的宗教と戦ひ、手痛く之を擊退したる事  
(乙) 二元的宗教哲學を征服したる事

第三世紀の始に於ける基督教會は「汝は如何なれば斯くまで遠く本來の教を離れしや、汝は如何なる者となり果てしや」との非難の聲に應じて、次の如く答ふるを得しならん。曰く「余は斯の如くなりぬ。余は多くの物を捨てざるを得ざりしが、余が取りたる者も多かりき。余は戦はざるを得ざりき。我身體は多く負傷し、我衣は塵にて満ちたれど、余は終に勝ちて家を建つるに至りぬ。余は能く多神教を擊退せり、余は政治的宗教なる一疇兒を倒し、殆ど之を滅亡せしめたり。余は少しも幽妙なる宗教哲學の誘惑に耳を傾けず、却て天地の創造者たる全能の神を之と對峙せしめ、以て之を威壓したりき。最後に余は一大工業を起して城を築き、樓を設け、壘を高くし、濠を深くせり。是れ一は寶物を蓄へ一は弱者を保護せんが爲なり」と。教會は實に斯の如く答ふるを得しなり。而かも其言ふ所は眞實にてありき。論者或は曰はん、自然崇



拜及び多神教を撃退したるが如きは本と小事のみ何となれば彼等は已に老朽せる樹木の如く其抵抗力や甚だ微弱なりしが故なりと謬見と曰はざるべからず。當時自然宗教が其形式に於て衰頹を來し已に滅亡に近かりしは事實なれど、自然宗教其者は尙悔るべからざる勁敵なりき。今日と雖も熱心なる豫言者の出で、教を設くあらんには自然宗教も亦大に人心を動かすを得べきなり。況んや數千年の昔をや、萬物生命の源たる太陽の頌榮歌は、ゲーテの如き人にすら死に至る迄消えざる感動を與へ、終に彼をして太陽崇拜者たらしめし程なりき。況してや科學が未だ自然界より諸神を放逐せざりし昔時にありては斯かる頌榮の歌は如何ばかり人心を動かしたるべき。余輩が基督教は自然宗教を征服せりと曰ふは唯だ一二の形式上の事を曰へるに非ず、形式上の變化は毫も珍らしき事に非ざるなり。然るに今や基督教は確乎たる大團體を有し、人心に徹底する所の教訓の力によりて、自然崇拜と多神教を駁撃し、以て一層深遠なる宗教的情操を保護したりき。次に政治的宗教に對しては如何。帝王崇拜カイトラクトの裏面には國家てふ大勢力のある事なれば、基督教が之と相結托するは容易にして且萬全の策なるが如く見えしも、基督教は之に向て一歩も譲らざりしのみならず、終に國家的偶像を滅亡せしめたりき。實に宗教と政

治の間、神とカイザルとの間に堅牢なる牆壁を築かんが爲に多くの殉教者の血は流されたりき。終りに教會は人々正さに宗教哲學に酔へる時代に於て、能く二元的思索に對して己が地盤を固むるを得たり。二元的思想は屢々基督教的思想に親近し來りし事あるも、教會は斷じて之を拒絶し、固く一神教の思想を執つて之に對したりき。然るに此争鬪をして一層困難ならしめたるは、多くの基督教徒而かも有力なる基督教徒にして、敵と相提携して二元的思想を有する者あるに至りし事なり。而かも教會は頑として動かざりき。若し夫れ、教會が一方には希臘羅馬的思想に對して斯の如き反抗を爲しながら他方には却て其精神を採用する所ありしを思はば、(是れ猶太教には見る能はざる現象なり。希臘教が猶太教に對する態度は「汝は我を引く力を有せんも我を繋ぐの力を有せず」の語に由りて之を知るべし。若し又現今に至るまで數千年間に亘る凡ての教會組織の基礎は實に第二世紀の中に置かれし事を思はば、吾人は當時の教會が爲したる事業の廣大なるに舌を捲かざるを得ざるなり。

余輩は前に掲げたる二箇の問題に歸るべし、曰く如何にして此宗教上の大變革は



起りたるか、曰く福音は此變革の間に處して能く其本領を保ちたるか、若し保ちたりとせば如何にしてなるや。

第一、若し余にして誤らずんば、茲に此大變革を起し、新組織を造らしめたる三大勢力ありしなり。第一は宗教史上の普遍律に適へる勢力にして、何れの宗教の發達史中にも發見するを得べき者たり。新宗教の設立後、既に二世、三世を経て、百千の人々は、最早改宗に由らず、只だ祖先傳來の習慣によりて新宗教に歸依するに至れる時、

——テルチリアンガ基督教は、自ら作るべき者にて、誕生に由るべき者に、非すと曰

へるにも係はらず——又貴重なる獲物として熱心に基督教的信仰を固執せる者と相並んで、宗教を己が衣服の如く外面に纏へる信徒の多くあるに至れる時、此時こそ實に宗教上大變革の起るべき時なれ。即ち生ける感性与眞情との宗教は一變して習慣の宗教、隨て形式と律法との宗教となるべきの時なり。假令新宗教を組織するに當りては強大なる勢力と熱心と感情とを以てし、大に重を心靈上の自由に置く事を得んも、——此點に於てポロの教訓に勝る者何處にかある。——又假令信徒に向て不婚の生活を強ひ、或は獨り壯年者のみを採用するなど用意周到なるも、尙宗教を固定的、律法的と爲さんとする傾向は其働を已めざるなり。是に於て其

形式は忽ちに凝結すべく、否、形式の本義はそが凝結する處に存す。斯の如くして形式は形式の上に加へらるゝなり。然るに此等の形式たる管に規則、律法として尊崇せられしのみならず、知らずくゝ其中に宗教の眞髓を有する者、否、是れ眞髓其者なりと認めらるゝに至りぬ。宗教を自ら經驗する能はざる者の此處に至るは自然の勢あり、何となれば斯かる人の宗教より其形式を除けば、最早何物をも残さざればなり。又宗教を自ら經驗せる者も此形式を用ゆる事の必要を感じたりき。何となれば之に由らざれば人を動かす能はざればなり。前者は必ずしも偽善者に非ざるなり。素より眞正の宗教は彼等に向て閉ぢ、最重の要素は已に涸れたるは事實あれども、自ら宗教的生活を爲さざる者と雖も、尙種々の立場より宗教の價値を認むるを得べきなり。即ち或は道德の立場より、或は警察の立場より、而して殊に美學の立場より宗教を尊重するを得べきなり。例へば十九世紀の始、怪譚小説家が加特力教を再び獨逸、佛蘭西に輸入せしや、就中シャトープリアンの如きは加特力教の美は終に歌ひ盡す能はざる者なるを感じ、己も亦た加特力教徒と同様の感想を有する者なりと思へり。然るに鋭き批評家は曰ふ「シャトープリアンの感想は誤れり、彼は自ら眞の加特力教徒か」と思へるも、實は荒廢せる教會の古趾に立ち、「嗚呼美なる哉」と叫



べるに過ぎずと、門外漢にして宗教を尊ぶ者皆此類なり。一步を進めて稍々宗教の真髓に近ける者と雖も、同じく既に宗教上の經驗を失ひ、若くは要領を得ざる斷片的經驗を有するに過ぎざる者甚だ多し、彼等は外形上の事及び之に關する動作に對しては、大なる尊敬と注意とを以て之を嚴守し、凡て教理、規則、制度及び禮拜の形式として現はれ來る者は皆事の真髓として之を尊崇するを常とす。されば大變革を來すべき第一の要素は最も廣き意味に於ける原始的熱心去りて、直ちに律法と形式の宗教の起る事なりとす。

第二、斯の如く二世紀に於ては本來の要素の去れるあり、新要素の外より來れるあり、若し加特力教は猶太教とも全く絶縁する能はざりしとせば、己が永久の住所たるべき希臘羅馬の世界の思想と其文明との感化力に抵抗する能はざりしは毫も怪むを要せざるなり。殊に猶太の宗教及び猶太國民と全く關係を斷ちたる曉に於ける希臘羅馬的思想が興へたる感化力の如何に著大なりしよ、加特力教は幽靈の如く身體を求めつゝ、地上を彷徨せり。此幽靈は自ら身體を造るを得たるも、之を造るには外物を己に同化するを要したりき。實に希臘主義と希臘思想とが教會に浸潤し、以て福音と相結合したる事は第二世紀の教會歴史に特筆大書すべき事件に

して、此時置かれたる基礎は、爾來數百千年尙其變更を見ざりき。吾人は今希臘主義が基督教に影響したる歴史に三階級を劃し、更に加ふるにそが準備時代を以てするを得べし。此準備時代に關しては余輩已に述ぶる所ありき、即ち準備時代は福音の起源のある所にして、そが成立の條件にてありき。アレキサンドル大帝が世界の大勢を一變し、東洋諸國民の間及び此等國民と希臘人との間にありし墻壁を打破せしが爲、猶太教は始て従前の限界を超えて世界的宗教を爲らんと勉むるに至りぬ。然るに人は東洋にありても希臘の空氣を呼吸するを得、思想上の地平線は自國民以外にも擴がれる事を知るに至りては時已に熟したるなり。さればとて福音書は暫く置き、初代の基督教的書冊の中に希臘的要素甚だ多しとは曰ふ能はざるなり。若し希臘的要素を發見せんと欲せば、新宗教の發現をして可能ならしむる點に於てせざる可らず。ポーロ、路加、約翰の書中、最も著しく現はれたる者を除きては、吾人は今此問題を詳論せざるべし、抑々一定の希臘思想及び希臘的生活が始めて教會に入り來りしは、凡そ紀元百三十年の頃なりとす。希臘の宗教哲學入り來りて基督教の中心に逼りたるは實に此時なりき。宗教哲學は基督教と親近せん事を求め、基督教も手を出して此新同盟者と握手したりき。即ち第一期は唯だ希臘哲學の入



來ありしのみにて、希臘の神話及び宗教は未だ來らざりき即ち教會はソクラテス以來哲學が造り得たる一大資産の中より、注意を加へて採用する所ありたるなり。爾來凡そ一世紀を経て紀元二百二十年若くは二百三十年の頃第二期は始れり希臘の神秘と文明とが教會に侵入せしは此時ありきされど神話及び多神教は未だなりき然るに又々一世紀を隔て、希臘主義は其全内容を以て教會内に其地位を占むるに至りぬ。素より教會が之を受入るゝに當り、多少警戒する所なきに非ざりしも要するに附札の變換を爲せしのみにて、事實の上には希臘主義は全然教會に入り來り、終に教會をして聖徒を崇拜せしめ、茲に劣等なる基督教を現出せしむるに至りぬ。されど余輩は今第二期及び第三期に付て語らんとする者に非ず、唯だ希臘哲學、就中プラトーンの哲學の輸入に付て語らんとするのみ、何人も是れ同類相結びたる者なるを否定する能はざるべし。元來希臘の宗教的倫理は内部的經驗と形而上學的思辨とに基きて、苦心慘憺の結果として得たる者あれば、其中には深くして優しき感情あり、真面目なる所あり、威嚴ある所あり、加ふるに一神教的敬虔の念深かりしが故に基督教は此の如き寶物の前に來るや、冷然として過ぎ行く事能はざりき。如何にも此寶物には缺けたる所怪しく見えし所多かりき。即ち希臘的倫

理は之を實際的生命として示すを得べき。一大人格を缺きたりき。又常に惡鬼崇拜及び多神教と結合したるは甚だ奇怪に見えたる所なりき。而かも教會は全部に於ても各部に於ても己れ之と同族あるとを感じ、茲に之を採用するに至りぬ。

希臘的倫理の外に希臘の宇宙論的思想も亦教會に入りぬ。此思想たるは僅々數十年の後は、基督教の教理中重要な地位を占領せしものなり。ロゴスの説はなり。本と希臘思想は世界と精神的生活との觀察より始まり、進んで活動的中心觀念ツェントラルイデーの思想に到達せり。如何なる階段を経て此思想に到達せしやは今茲に説明すべきに非ず。此中心觀念の中に世界と思想と倫理との最高原理は悉く統一せられ、又其中にて靜止的勢力と區別さるゝ創造的活動的勢力としての神を見るべかりき。實に二世紀の好に於て基督教の辨證學者が「ロゴスは即ち耶穌基督ありとの方程式を造りたる事は基督教々理史上に於ける空前の一大轉歩ありき。素より彼等に先ちて昔の教師等が基督の要性として多く擧げたるが中に、彼を「ロゴス」と呼びたる事ありき。然り約翰の如きは已に「ロゴスは即ち耶穌基督なり」と曰へり。(約一の五)然れども約翰は未だ之を以て基督に關する全考察の基礎とは爲さざりき。約翰の心には



「ロゴス」は基督の一要件に過ぎざりしかり。然るに今や改宗前已にプラトーンや、ストイツク<sup>1</sup>の哲學思想を抱きたる教師出で來りしが、彼等の世界觀には「ロゴス」てふ觀念は到底離すべからざる者にてありき。是に於てか彼等は曰ふ、耶蘇基督は取も直さず「ロゴス」の化身なり。此「ロゴス」は耶蘇として化身する迄は唯だ一種の力として己を顯はしたるのみと。昔は人の了解する能はざる「メシヤ」の觀念ありしが、今や忽焉として人の了解すべき者出で來りぬ。多くの議論中に動搖しつゝありし基督論は、今や確乎たる基礎を得、世界に對する基督の地位は確立せられ、基督と神との關係は其秘密を破り、宇宙と理性と倫理とは皆な一に歸する者となりぬ。是れ實に公式としては驚くべき者なりき。思ふに此公式は使徒パウロ<sup>2</sup>其他昔の教師等が提出せる「メシヤ」論によりて準備せられ、若くは促がされたる者に非ざるか。基督にある神性は「ロゴス」なりとの思想は數種の問題を引起したるに同時に、此等問題の範圍と方法を一定したりき。教會が凡の反對者に對し基督の特性として擧ぐる所は極て單純なりき。然るに此單純なる觀念は必要に應じて或は基督を活動の神と爲し、或は最初に生れたる兄弟、又は神の創造の始なりとも考ふるを得し程、人の思想に自由と活動の場所とを與へたりき。

希臘の哲學者が基督と「ロゴス」を同一視するに至りし事は、基督の教訓が彼等に與へたる印象の如何に強かりしを證明する者たり。ロゴスが化身して一個の歴史的人物と爲るべしとは彼等が思ひも初めざりし所ありき。猶太の思想家例へば「<sup>1</sup>パロ」の如き人すらも「メシヤ」即ち「ロゴス」なりとの方程式には達せざりき。此方程式は歴史上の事實に形而上學的意義を與へ、時間空間の中に存在したる人物を宇宙論及び宗教哲學の中に引入れたる者ありき。斯の如く一個の人物を特別に區別したる結果として、一般歴史なる者は宇宙活動の一部と爲さるゝに至りぬ。『ロゴス』を基督と同一視する事は希臘哲學と使徒等の信仰とを融合せしめたる要件にして、希臘の思想家は之に由りて使徒等の信仰に入るを得たりき。斯の如き同一視は吾人の多數には準許すべからざる事と思はるべし。何となれば吾人の宇宙觀及び倫理觀は「ロゴス」の實在てふ思想に到達せざればなり。然れども當時にありて「ロゴス」が基督教を希臘思想と結合するに甚だ適當なる觀念たりし事を認めざる者は、寧ろ替者なりと曰はざる可らず。且今日にても此觀念の中に有力なる意義ある事を認むるは難きに非ず。然れども基督を以て「ロゴス」と爲したる事は基督教の爲に圓滿なる幸福にては非ざりき。抑「ロゴス」の思想が人の興味を惹起せしむ



と初代に於ける基督論の比に非ず。之が爲め福音は其單純なる性質を失ひ、次第々々に宗教哲學と化し去りぬ。我等の間に「ロゴス」現はれたりとの一言は、殆んど人を酔はしむるが如き魔力を有したりき。然れども、その人の心に燃やしたる熱心と感情とは、必ずしも人を耶蘇基督が宣傳したる神に導く者には非ざりき。

第三、基督教本來の要素去りて希臘的新要素の來れる事のみにては、未だ基督教が第二世紀に經驗したる一大變化を説明するに足らず。吾人は、第三に、基督教が自己の境域内に於て烈しき戰爭を爲したる事に及ばざる可らず。徐々に入り來る希臘哲學と相並行して、教會全部には急劇なる希臘的感化とも總稱すべき實驗の行はるゝありき。是れ實に歴史上偉大なる活劇にして、而かも當時にありては最も恐るべき危険の隱るゝ所なりき。第二世紀は實に前代未聞の宗教混合時代、又神政體時代にして、基督教は即ち其一要素に過ぎずして、唯だ最重の要素たりしのみなりき。此運動の張本者たる希臘主義は、既に有らゆる秘密及び最も莊嚴にして又最も不合理なる東洋的禮拜の思想を吸収し、之に向て哲學的實は譬喩的説明を加へ、以て一大組織を造りたりき。然るに希臘主義は今や、猛然として基督教に逼り來り、仰で其教訓の莊嚴なるを見て、心動き、終に耶蘇基督を世の救世主として尊崇し、苟も基

督教が受け入るゝ限は、文明と曰はず、知識と曰はず、己が持てる財寶を悉く其前に献げたり、されば基督の教訓は恰も帝王の入來の如く、己に準備せられたる世界哲學、宗教哲學及び神秘說の中に歡迎せられたりき。嗚呼、此教訓が希臘人に與へたる感想の何ぞ深かりしや、而して此處如何に誘惑の潜伏せし所なりしぞ。人は此運動を呼んで「諾斯土教」(即ち宗教主義)と曰へるが、此諾斯土教は豊富なる宗教的實驗を以て基督の名下に組織せられ、又多くの基督教的思想を自ら感ずると強く且深く、未だ形なき者には形を與へ、外形の不完全なる者は之を完成し、以て基督教運動の全流を己が河底に導かんごせり。然れども信徒等の多數は監督の指導に由りて幸に斯かる誘惑に遠かり、此處には惡鬼の誘惑の隱るゝありと信じて之と戦ふを得たりき。所謂戦とは問題の解決に關する戦なりき。即ち基督教の範圍を確定し、此範圍に入らざる者は凡て異教的なりと説明する事にてありき。實に諾斯土教との戦は、教會をして教理、禮拜及び規律を堅固なる形式と律法とに包括せしめ、若し服従せざる者ある時は之を破門するの必要あると感せしめたり。教會は傳來の者を貴び之を保存するを唯一の務なりと確信せし程なれば、教會が要求する所の服従は即ち神の求むる所の服従なると、及び論戰の武器たる其教理は即ち宗教其者の宿



れる者なる事は教會が夢にも疑ふ能はざりし所なりき。  
 若し加特力なる名稱を以て教理及び律法の教會を指す者なりとせば、加特力教會の起原は諾斯土教との論戰にありと謂ふを得べし、教會は之と戰ひて勝利を獲るが爲には高き價を拂はざる可らざりき。否、吾人は殆ど敗者が勝者に法律を課したりとの確言を應用するを得るなり、教會が二元論と鋭き希臘主義とを防禦せし迄は善かりしも、遂に組織的教理及び一定の外形的禮拜と相結合したるが爲に會て諾斯土教の缺點として攻撃せし者も今や己れ自ら之を採用するに至りぬ、凡そ人は他人と爭論するに當り、一々己が題目を反對者の題目と相對峙せしむる事により、終には知らず己の立場を敵の立場に變する者なり、嗚呼、教會が斯の如くして多大の自由を失ひたるこそ是非なけれ、今や教會は次の如く宣言せざるを得ずなりぬ、曰く、汝先づ教理を是認し、教會の制度に服従し、定まりたる媒介を知り得ずば、汝は基督教徒に非ず、又神と係りなき者なり」と如何なる宗教的經驗と雖も苟くも正統教理に適ひ、僧侶の準許を得たる者に非ざる限りは正統なる經驗と稱するを得ざりき、教會は斯くするより外に、諾斯土教に對するの途を知らざりき、然るに敵に對する自衛の目的を以て外より造られし者、今や内なる保護神となりしのみ

か、宗教の精髓とはかりたるなり、事の此處に至れるは素より諾斯土教との論戰の結果のみならずして、前に擧げたる二個の要素も亦預つて力ありしなるべし、然れども其來るや斯の如く迅速にして其組織の強固なることドラコーの法律にも劣らざりし程なる事は、確かに傳說的宗教の死活問題たる此論戰の結果たりしなり、若し夫れ基督教が律法的、僧侶的制度と化せし事を一二の人の野心に出でしものと論ずるが如きは取るに足らざる皮相の説のみ、基督教が此處に至れるは、その固有の生命的要素の已に消滅せし事によりて説明し得て餘ありと曰ふべし、語に曰く「凡人は法律的主權を造る」と然り、習慣と服従の外、宗教を知らざる者始て僧侶を造るなり、是れ己が重き責任の一部を僧侶に分擔せしめんとすればあり、斯かる人は亦律法を造る、是れ宗教心の缺乏せる者には、律法は却て福音よりも氣樂なればなり。

以上吾人は基督教をして大革新を爲さしめたる各要素を畧説せんと試みたり、殘るは第二の問題にして、即ち福音は此革新の中において其本領を維持したるや、又如何にして之を維持したるや是なり、而して之は全く別問題なる事は已に論じた



る所によりて明かなり。されど吾人は一層精密に本問題を研究せんとするなり。

## 第十二回

三世紀の始に於ける基督教會の内狀を百二十年前の當時に比較する者は、二者の間に思想感情の著しき相違あるに驚くとならん。彼は一方には加特力教會設立の爲に偉大なる力の顯はれし事及び教會が各方面に働く勢の猛烈なりし事を賞讃すべけれど、他方には初代教會に存したる直接も自由も靈の一致も皆已に消えて跡なきに至れるを惜むべし。彼は教會が基督教を救ひ之をして時代思想の併呑する所たらしめざりし事及び健氣にも基督教の爲に急劇なる希臘主義の侵入を防戦せしを多とすべきも、之と同時に教會が餘りに高き價を拂ひしとをも看過する能はざるべし。吾人は進んで加特力教會が基督教に與へたる變化に付て更に詳述する所あらんとす。

第一、加特力教會は宗教上の自由と獨立とを危くせり。教會は教えて曰ふ苟くも己が宗教上の經驗と知識とを教會の信條に屈從せしめざる者は決して基督教徒たる能はず。隨て神の子たるの資格を有せざる者なりと加ふるに教會は心靈てふと

を極めて狹義に解釋せしが爲め、心靈は遂に心靈としての活動を失ふに至りぬ。不幸は茲に止まらず。各信徒は特種の場合を除くの外は宗教上の幼年者として先づ教會に服従すべき者とせられ、何時迄も自主獨立の人たる能はずして、全然教會の教理、僧侶、禮典及び聖經の羈約の下に立たざるべからざりき。吾人が今日加特力教の敬虔と呼びて之を福音的敬虔と區別する所のものは其起源已に當時に存せしなり。宗教上の直接は斯の如くして侵害せられ殆ど回復の望なきに至りぬ。

第二、希臘主義の鋭き侵入を支へたる流石の加特力教會も希臘の哲學思想には叶はざりけん。眞の宗教は教理を本とす。教理は知識の全體なり。この思想は漸次に教會内に浸潤するに至りぬ。然れども奴隸と老婆の宗教と見ゆる此信仰が堂々たる希臘の凡神哲學を残らず同化せしのみか、更に之を改鑄して耶蘇基督の教訓と融合せしめんと試みたる所實に基督教の中には凄まじき勢力の藏れあるを證する者と謂ふべし。されどそれが必然の結果として基督教は其根本的興味を失ひ、却て大々的負擔の下に苦しむとはありぬ。回顧すれば「救はるゝ爲め我何を爲すべきや」との疑問に對し、耶蘇基督及び其使徒等が與へし解答は極て簡單なりしが、今や繁雜冗長なる解答の外、得る能はざるに至りぬ。素より俗人の爲にとて簡單なる解答



なきに非ざりしも、其れだけ彼等は不完全なる者と見做され、唯々諾々、只だ智者に是れ従ふの外なかりき。爾來基督教が永く抱持せし所の智力主義インテリゲンチヤリズムは既に此時より其萌芽を現はしぬ。然るに基督教は斯くも廣大深遠、容易に解する能はざる教理を有するに至りしより、竟に其重荷に堪はず、却て真面目なる性質を失はんとせり。而して真面目なる性質は各個人が直接に感じ、又直接に祝福を受くる所に存しぬ。素より基督教は有らゆる知識及び有らゆる知力的生活と相矛盾せざらんとを欲す。されど加特力教會に於けるが如く、得たる知識を以て福音其者、若くは福音の必要條件なるが如く思ふに至りては、假令其知識にして事實と眞理とに合する所あるも、宗教としては損害を被らざるを得ざるなり。而して、此損害は已に三世紀の始に於て明かに認むるを得べかりき。

第三、教會組織なる者が一たび特別の地位を占むるや、忽ちにして宗教上の一大勢力とはなりぬ。而かも其起源を尋ねれば主にある兄弟の團體の少しく發達せる者に過ぎざりき。即ち信徒等が共に神を禮拜せんが爲め一定の場所と形式とを撰びたる者にて、曰は、天上の教會の面影オモガタとも稱すべき者なりき。然るに今や一變して嚴然たる教會組織とあり、而して其組織や宗教上缺くべからざる者となりぬ。其教

ゆる所に曰く、基督の靈は各人に必要なるものを悉く教會の内に置き給へるが故に、人々は愛と信仰とを以て教會に連ならざるべからず。又聖靈は唯だ教會の内にのみ働き給ふが故に、凡ての恩恵は教會の外に求むべきに非ずと。斯くて教會に連ならざりし基督教徒が早晚異教徒と化し、邪說邪道に陥らざる者なかりしは隠れもなき事實なりき。加ふるに他方には、諸斯土教に對する爭論もありて、終に複雑なる設備と形式とを有する教會組織は漸次に「基督の新婦教會を」或は眞のエルサレム（天の理想的教會を云ふ）と同一視さるゝに至りぬ。是に於てか教會は揚言して曰く、教會は即ち神の創造せし者なれば、人之を犯すべからず。又聖靈の定めし者なれば、人之を改むべからず。隨て教會が下す所の命令は同じく神聖なる者なりと。嗚呼、宗教上の自由が受けたる所の損害も、茲に至つて極まれりと謂ふべし。

第四、福音を眞に喜の消息として宣傳することに於て、第二世紀は第一世紀に劣る所ありき。而して其理由は一にして足らず。各人宗教上の經驗が使徒ポロや第四福音書記者に及ばざりし事も一の理由なるべく、又使徒時代には比較的深遠なる教訓によりて制限せられし末日の希望が、今や其制限を破つて高潮に達せし事も一の理由なるべし。實に二世紀の基督教が抱きし恐怖と希望とはポロが抱きし



ものよりも強く、隨て耶蘇の教訓に接觸せる點に於ても、一見ポロに勝れるものあるが如くなりしも、それは唯だ外觀のみなりき。何となれば既に言へる如く耶蘇の根本的教訓は「神は即ち父なる事」なればなり。而して此教訓は羅馬書八章(十四節)にも明かなるが如く、ポロが其信仰を宣傳するに當りて標榜せし所の眞理に外ならず。然るに二世紀の基督教にありては人心大に恐怖の支配する所となり、此恐怖は基督教が固有の活力を失ひ、漸く俗化せんとするに隨ひて増長する者なり。倫理思想は愈々自由を失ひ、法文的、嚴格的となりりぬ。而して倫理上の嚴格主義は常に世俗主義の半面にてあるなり。然るに萬人悉く嚴格主義の倫理に服従せんとは到底無理なる注文と思はれしが故に、教會は此時より已に一策を案じ、完全なる道徳と可○なり○の道徳とを區別するに至れり。纏つて其由來を尋ねんと欲せば過去に遡らざるべからざるが、吾人は今之を爲すの暇を有せず。唯だ二世紀の末年より此區別が實に有害なる者となりし事を一言して已まんのみ。抑々此區別たるや必要より生じて道徳となりたる者なるが、程なく基督教が加特力教會として存在するには缺くべからざる要素となりぬ。之が爲に基督教の理想は唯一ありとの觀念は攪亂せられ、又福音中には絶て見る能はざる者を現するに至れり。即ち人の徳行

を判するに分量上の計算を爲すに至りぬ。素より福音と雖も篤信と薄信とを區別し、徳行の大小を區別せざるに非ざるも、加特力教にては神の國に於ける最小の者も所謂徳行家としては尙完全なる者たるを得るなり。

以上は三世紀の始までに基督教が經驗したる著しき變化なるが、斯くても尙福音は其本色を失はざりしか。若し失はざりしとせば何によりて之を知るを得るや。請ふ之を史上の事實に照せ、若し文字によりて幾分にも基督教徒の靈的生命を伺ふを得べしとせば、歴史は明瞭に又痛快に基督教の眞生命は未だ死せざりし事を證明せる者と云ふを得べし。見よパーベチヤ及びフリシタスの殉教と曰ひ、若くはリオンの教會より小亞細亞の教會に宛てたる書簡と云ひ、孰れも信仰建設の當時を除きては他に見る能はざる程の天晴れる信仰と、優しくして力ある道義の念とを現はせる者なるに、却て教會外形上の發達に付ては其痕跡だも示さざるなり。斯くて神に達するの道は明確となり、單純なる信仰的生涯は攪亂、壓迫を被むるとなかりき。次に著作家の一例としてアレキサンデリアのクレメンスを曰はんか、彼は紀元二百年頃の基督教的宗教哲學者にして全然思索の人にてありき。彼は思想家として基督教を教理の大海と變じたる程にて、徹頭徹尾希臘人の神經を有せ



し人なるに、一度其著書に接すれば吾人は彼も亦福音の中より平和、喜樂を得たる者なるを知るを得べし。彼は自ら之を公言し且つ生ける神の力を證明せり。彼が哲學、權威、思索、外形的宗教等の雲霧を貫きて神子たる自由の榮光に入りしを思へば殆ど別人たるの感なき能はず。素より攝理に對する信仰といひ、基督に對する信仰といひ、自由の教理といひ、將た其倫理説といひ彼の語りし所は一として希臘的特色を帯びざるはなかりき。されど又一として斬新ならざるはなく、又真正なる基督教的精神を現はさざるはなかりき。今若しクレメンヌと世を同じふして性質を異にせし基督教徒タルチュリアンを呼び來りて互に相比較せば、吾人は容易に左の事を發見するを得ん。曰く彼等の宗教上の共通點は彼等が共に福音を経験せし事あり。否、福音其者にあり。試みにタルチュリアンが筆に成れる主の祈禱の説明を讀み深く思ふ所あらんには、此熱血性の亞弗利加人、此嚴刻なる異端排斥者、權威と理性の代表者、強情なる辨護者、而して又熱心なる僧侶が福音の根本問題に關しては深厚なる興味と充分なる知識とを有せし事を知るを得ん。故に曰く初代の加特力教會に於ては福音は未だ滅びざりしなりと。

次に曰ふべきは初代の教會が固く一種固有の思想を抱き、之を表白するや後代の

加特力教徒をして靦然たらしむる者ありしとなり。其思想とは即ち基督教會を以て勤勉なる兄弟的團體と爲すと是なり。

終りに言はん初代の教會素より弱點なきに非ざりしも、永生の希望、基督に對する充全なる信仰、犠牲に甘んずると、道德上純潔なると等も亦初代教會の特徴なりしとは疑ふべからず。此事たるオリゲーンの如き眞理を愛する人のみならず、ルキアンの如き異教的學者すらも保證せる所なり。オリゲーンは異教的反對者に向ひ意氣昂然として語るを得しならん。曰く道德の點に於て天下何れの團體か基督教の團體に優れる者あらんやと。素より當時の基督教は既に厚き外皮を被むり、之を破て其核心に達すると漸く難く、それが固有の生命も既に其大部分を失へり。然れども福音の恩賜と使命とは依然として未だ地に落ちず、且つ教會が福音の周圍に築きたる壘壁も多くの人には福音に達するの階段にてありき。

今や一步を進めて

### 希臘教會に於ける基督教

を考察せん。



余は諸君を誘ふて共に數世紀以後に降り希臘教會の現狀を尋ね、其本質が千有餘年の間變化せざりし所以を究めんと欲す。實に三世紀より十九世紀に至る間、希臘教會の歴史は一として注意すべき變動ありしを見ず。是れ吾人が本問題を研究するに當り、現今の希臘教會に足場を定むる所以なり。先づ三箇の問題を提出すべし。

(一) 希臘教會は何を爲せしや。

(二) 希臘教會の特徴如何。

(三) 福音は希臘教會に依て如何に變せられ、又如何なる者として存在せしや。

(一) 希臘教會は何を爲せしや。——曰く二あり。

第一、希臘教會は地中海東岸の諸國より北氷洋岸に至る廣大なる邦土に於ける異教及び多神教をして悉く滅亡せしめたり。抑も希臘教が斯の如き大勝利

を獲たるは三世紀より六世紀に至る間の事なりき。而して希臘の諸神が其前に倒るゝや、聲なく響なく、慘劇なく、反抗なく、老樹の自然に仆るゝが如くなりしとは抑も何等の痛快なる勝利ぞや。若し夫れ諸神が己の倒るゝに先ち、其權力の大部分を教會の聖徒に献納したるが如きは之を指示して已まのみ。唯だ注意すべきは希臘教會の宗教哲學は希臘哲學よりも強かりけん。希臘哲學の殿將たる

新プラトニヤ學派も諸神の跡を追ふて衰滅に歸したるとなり。斯の如くして終に全然希臘思想を征服せし事は天晴れの成功と曰はざるべからず。而して其成功や今に至つて朽ちざるあり。

第二、希臘教會は之を信奉する各國民と相融合して、宗教及び教會を以て國民的保護神、唯一の保護神となせり。——乞ふ希臘人に行け、露西亞人に行け、或は又

アルメニア人に行け、諸君は至る所教會と國體とは鳥の雙翼の如く密接なる關係を有する者あるを發見すべし。此等の國民は一朝事あれば教會の爲に粉骨碎身をも辭せざるなり。是れ決して回々教の壓迫を被りたるが爲のみにあらず、何となれば露國人の如き此壓迫を被らざりし者も尙此精神を有すればなり。露國にも亦宗派の別なきに非ざれども、尙教會と國民との關係は極て親密にして且強固なり。之を知らんと欲する者は獨りモスコの出版物のみに據るべからず。須らくトルストイの「村落物語」の類を讀むべきなり。之を讀む者は永遠、犠牲、同情兄弟の愛等の教訓と相並びて教會なる觀念が、斯くも深く人心に刻まれたるか。と驚嘆せざるを得ざるべし。假令希臘教會の僧侶は社會上の地位低く、屢々人の輕侮する所たりと雖も、之によりて僧侶が教會の代表者としては非常の高位



を占むるを否定すべからず。理想的僧侶が東歐國民の精神に刻まるゝや實に甚だ深きものあるなり。

希臘教會が爲したるとは要するに以上の二點に出でず。若し之に加へて希臘教會は文化の擴布に與かりて力ありと曰ふ者あらば、是れ文化の標準を極めて低くしたる者にて誇大の言と曰ふの外なし。又回々教に對しても曾て多神教を征したる如き勢を以て之に當る能はざるあり。露國教會の傳道會社は今日も尙多神教を征服しつゝありと雖も、他方には回々教の爲に大なる版圖を失ひ、之を回復する能はざるのみか、回々教の勢は益々募り、其領土は西アドリアチック海に至り、北ボスニヤ地方に及び、曾て基督教徒たりし多數のアルパニヤ人及びスラブ民族も其前に降伏するに至れり。假令其領土には尙基督教國民の固く己が信仰を維持せるありと雖も、回々教が希臘教の爲に一大勁敵たる事は最早蓋ふべからざる事實あり。

(二)希臘教會の特徴如何。——此問題に答ふる容易のことに非ず。何となれば希臘教會は人の知れる如く非常に繁雜なる組織を有すればなり。即ち其中には數百年間と曰はず、實に數千年間の感情と迷信と知識と禮拜上の觀念とを含蓄せるなり。人若し希臘教の外部を觀察し、其禮拜の形式、壯嚴なる禮典、繁雜なる儀式、由緒ある遺物、

畫像、祭司、僧侶、及び神秘的觀念等を見て、一方には之を第一世紀の教會に比較し、他方には新プラトニ派時代の希臘の宗教と比較する時は、何人も希臘教會は前者に屬すと曰ふよりは寧ろ後者に屬すと曰ふの正常なるを認むべし。實に希臘教會は希臘風の衣冠を着けたる基督教の子にあらざりて、却て基督教の衣冠を着けたる希臘の子なるが如し。されば第一世紀の基督教徒は斯の如き宗教を攻撃したらんと恰かも彼等がマグナ、マール（マグナ、マール即ち大母神は小亞細亞に信奉せられたる同一視し、心を傾けて尊崇し、之を祭るに東洋流の儀式）及びジュース（ジュースは希臘の女神レアを用ゐたり、此女神の崇拜は終に希臘全部に擴がれり。）ソール（ソールは女神の尊稱として用ゐらる）の崇拜を攻撃せしが如くなるべし。希臘教會が殆ど福音其者の如く尊重せる者の多數は、初代の教會が思ひも初めざりし者たり。有らゆる禮拜の大典より數多の獨斷的教理に至るまで比々皆然らざるはなし。随つて其中より「基督」て文字をさへ取り去らんには、基督教本來の意義は殆ど忘却せらるゝに至るべし。されば希臘教會は其外觀より曰へば全く希臘の宗教史に入るべき者なり。而して昔時の希臘宗教と異なる點は、一は基督教より、而して一は他より影響を受けたるの差あるのみ。吾人は又曰はん、希臘教會は其外形に於ては東洋化したる希臘思想と基督教の教訓とが相結合したる自然の產物なりと。



されば希臘教會は歴史が自然的進行によりて或宗教を本として造り出したる者なり。即ち三世紀より六世紀の間に於て、或宗教の中より自然に造られざるを得ざりし者なり。此意義に於て希臘教會は自然宗教たるなり。抑も自然宗教に二義あり。通常の意義によれば自然宗教ある名稱は、凡ての宗教に見る所の單純なる感情及び動作を概括する所の抽象的言語たり。然るに實際斯かる意義の宗教ありや。自然宗教は果して吾人が之を了解し得る程に明瞭なる形を有するや。是れ甚だ疑はし。されば第二の意義を探るに若かず。第二の意義に由れば自然宗教とは人間歴史の上に活動せる數多の自然力が、宗教の上に働くことを已めたる時に始て成立する所の宗教最終の生産物たるなり。此等の自然力や、其外面は異なれども其本は同じ。此力なく宗教を變化して己が意に滿つるに至れば即ち止む。而して宗教を變化するや、神聖及び敬虔等の要素を排斥するとなし、却て之を以て宗教上或必要を有する者とせり。此自然力は手當り次第に凡ての者を一種の大氣中に投入する者なり。此大氣や彼自然力が自然的存在を爲すに最も必要なる條件たると、恰かも吾人が呼吸する空氣の如く然り。されば希臘教會は此意義に於て自然宗教たるなり。三世紀以來基督教は此自然力に任せ、滔々たる普通歴史の濁流に入り、豫言者も、改革者も、天才も、之を如何ともする能はざりき。此傾向は六世紀に於て完成し、八世紀九世紀となりては其地盤愈々固く、猛烈なる攻撃も之を動かす能はざりき。爾來教會の有様は平穩にして、管に大變動なかりしのみか、小變動すらも見る能はざりき。信徒等は教會に對して不平を抱かず、又改革の必要を感ぜざりしが如し。されば彼等は今日も尙依然として六世紀の自然宗教たる希臘教會に固着せるなり。

以上余は小心翼翼として外形上の希臘教會を論じたり。然れども吾人は外形により直ちに内部を推斷する能はざるなり。是れ一は教會組織の極めて繁雜なるに由り。希臘教會を以て希臘の宗教史に屬すべき者となすは素より正當なる見解たり。べきも、斯かる簡單なる斷定のみにては未だ大に盡さざる所あるなり。何となれば斯かる立場よりしては到底了解する能はざる者あればなり。故に希臘教會を正當に評價せんと欲せば、一層綿密に其特色を構成する所の各要素を吟味せざるべからず。

第一、傳説及び之に對する服従。——希臘教會は教えて曰ふ、聖ある者は天地間に自由自在の活動を爲す者に非ずして、(此斷定に例外あるとに關しては後に論ずる所あるべし)恰かも一大資本の如く倉庫(傳説を指す)の内に貯藏せらるる者なり。



吾人一切の需用は此資本の中より供給せらるべく、而して供給せらるゝ所の者は昔時の教父等が鑄造(の解)せし者と全く同一の形に鑄造せられざるべからずと、吾人は初代教會の中に斯かる思想の係(を)を認むるを得べし。即ち使徒行傳に曰く、「彼等は常に使徒等の教を受けたり」と、然らば之が實行と之に對する責任とは如何なる結果を生せしや。

(甲)使徒時代以後數百年の間に教會が設定せし事項は凡て使徒的と呼ばれたり。一層適切に之を曰へば、教會が立てる歴史上の地位に適合せん爲に、必要なりと考へられしとは、之なくば教會は存在する能はずとの理由、即ち教會存立の必要條件ありとの理由に由り之を使徒的と稱せり。

(乙)使徒等の教訓を守る事は第一に教會の禮典に關する規定を洩れなく嚴守する事に外ならずとは、希臘教會の金科玉條にして、神聖なる者は聖書の言句と宗教の形式とに固着せる者と教えらる。

此二つの思想たる、何れも古代的なり、或は聖なる者を以て庫内の寶物に比し、或は之を以て禮典の嚴守に外ならずとなす、何れも古代には珍らしからぬ思想にして、又古代には安全確實なる思想たるあり。斯かる世には聖なる者は唯だ傳説

と儀式に由りてのみ存在し、又之に由りてのみ近づくを得べしとせられ、隨て服從、尊敬、敬虔等は宗教的感情中最要の者とせらる。此等の感情たる、素より宗教に缺くべからざる者なりと雖も、そが宗教上の價値を有する所以は他にあり。即ち一は他の生命的感情の隨判者たるに由り、一は其目的物の高貴なるに由れり。實に傳説主義と儀式主義とは相寄つて希臘教會の著るしき特徴を爲し、之に由りて希臘教會が遠く福音を離れし事を示せり。

第二、正統教理(即ち)讀んで字の如く正當なる教理に過大の價を附したること。——希臘教會が正統教理を構成するや、實に嚴密を極め、其大成するに至るまで幾多の改正を加へたるなり、其教理や屢々異教徒を威嚇するに足る者あり。曰く救はるゝ者は獨り正統教理を抱く者のみにして、否らざる者は教會より放逐せられ凡ての權利を剝奪せらるべし。若し同國人にして正統教理を有せざる者あらば、癩病人の如く一切の交通を遮斷せらるべしと、斯の如き迷妄は今日尙所々の希臘教會に見るを得べく、其根本的精神は未だ廢らざるなり。斯かる傾向は古代の希臘人中にも認め得ざるに非ざりしも、此迷妄の起源を希臘にありと爲すが如きは斷じて許すべからず。況んや之を羅馬の法律に歸するをや。思ふに是れ數



多の原因の相寄りて爲せし不幸なる結果なるべし。顧みるに教會が會て、諾斯土教と烈しき生存競争を爲せし經驗は、時勢一變して羅馬帝國が基督教化したる時と雖も尙忘るゝと能はざりしなるべし。況してや羅馬政府が會て絶望の餘り教會に加へたる殘忍なる迫害をや。此二つの苦がき經驗は希臘教會が復讐の權利と異端者壓伏の必要とを感じたる所以を説明するに足るべし。加ふるにデオクレシヤン帝及びコンスタンチン帝の時より「君主は臣民に對し無限の權利と義務とを有す」て東洋流の專制主義大に尊重せらるゝに至りしが、此大變動の時に際し最も不幸ありし事は、羅馬皇帝が基督教的帝王たりしと同時に、否、同隣間に東洋的專制君主たりし事なり。何となれば皇帝の良心にして愈々強ければ、異教徒に對して愈々偏狭なるを免れざればなり。皇帝自ら信ずらく、神は我に托するに人の身體と靈とを以てせりと。斯の如くして國家と教會、否、國家的教會の併呑的正統主義起れり。而して教會は之を完成し、又之を聖別せんが爲め常に舊約聖書より例證を引けり。

斯の如く異教徒に對して偏狭なる態度を取るとは希臘の地には空前の事にてありき。されば其起源を希臘人に歸せんとするは素より不可なり。然れども希臘教の教理は如何にして構成せられしや、如何にして萬有神的哲學として組織せられしやと問はれなば、希臘人の力に由ると答ふるの外なし。又宗教が殆んど教理と同一視せらるゝに至りしとも同じく希臘人の所爲と云はざるを得ず。然るに説明を他に求めんとして使徒時代に遡り、基督教の教理は當時既に斯の如き意義を有し、又理論的とならんとする傾向を有せしとを指摘するも吾人を満足せしむる能はざるなり。思ふに此等の問題たるや既に述べたる如く他の側面より解釋すべき者たるなり。即ち知識主義は二世紀に於て辨證學者の始めて教會に輸入せし所の者にて爾來一方には諾斯土教との爭論により、他方には教會に屬せるアレキサンドリアの宗教哲學者によりて維持せられ、以て完成の域に達せるなり。然れども希臘教會の教理を唯だ其形式上より評價し、其發表の仕方及び範圍等を確定するのみにては未だ足らざるなり。吾人は更に内部に入りて其實質を探るべきなり。希臘教會は二個の特有なる點に由りて希臘の宗教哲學と區別するを得べし。二個の特有なる點とは一は天地創造に關する思想にして、他は救世主は神人兩性を有せりとの教理是なり。余は次回の講演に於て此二點を論じ、且つ傳説及び教理と相並んで希臘教會の特色を爲せる他の二要素即ち禮拜の形式と遁僧制度と



に論及せんとす。

### 第十三回

以上余輩は宗教としての希臘教が傳説主義と智力主義との二要素を以て其特色とせる事を論定せり、傳説主義に由れば傳説を神聖なる者とし、一切之が改良を許さざる事は其金科玉條たるのみならず、宗教其者を實證する事にてありき、斯の如きは全く古代的的思想にして、福音の教に反せる者たり、其故は傳説を尊重せざれば神と交通するを得ずと爲すが如きは福音の毛頭知らざる所なればあり、第二の要素たる智力主義は希臘より來りぬ、何をか智力主義と曰ふ、曰く福音を紡ぎて一切萬有を包括する凡神的、一大世界觀を造る事、曰く基督教は絶對的宗教なれば形而上學と曰はず、宇宙論と曰はず、將た又歴史と曰はず、有らゆる問題に付て教ゆる所なかるべからずとの確信、曰く天啓は即ち無數の教理と解説とに外ならずして、何れも其神聖なる事、重要なる事に於ては互に區別する所なしとする事はなり、此主義に由れば最高の價值を有する者は知識にして、吾人の靈の靈たる所以は唯だ知識を有するにあり、されば凡て美的、倫理的、宗教的の者も皆一種の知識と變せしむ

べく吾人の意志も生活も確實なる知識に由りて活動せしむべき者たるあり、基督教的信仰が一變して凡を包括する所の神知識(吾人は一種の宗教的感情に由りて神を知らるを得べしと爲す一種の神祕説)となり、信仰は即ち信仰的知識なりとせられし事は、希臘の地に於ける基督教が彼の地の宗教哲學に足を容れて、此處に留まりたる事を證する者なり。

天啓の内容としても、正統的教理としても、絶對的價值を有する、此一大凡神哲學の中に、之をして希臘宗教哲學と大に異なる特色を有せしむる、二要素あり、斯く曰ふも余は基督教が有する天啓を指すに非ず、何となれば新プラトニ學派も已に之を語りたればなり、所謂二要素とは天地創造説及び救世主の神人兩性説是なり、此二大思想は二個の要點に於て希臘の宗教哲學と相衝突し、屢々其熱心なる代表者を

して之を忍ぶべからざる異分子と感せしめたり。  
天地創造の思想に關しては余輩は多言を費すを要せず、抑々此思想が福音に一致する要素と同様の重を爲せし事は疑を容れず、此思想によりて神と世界との混合的關係は破られ、生ける神の存在と其力とは茲に表白せられたり、希臘に於ける基督教の思想家は、流石に希臘人の事なれば神を以て唯一の世界結合力、數多ある者の統一者、又複雑なる萬有の目的なりとして了解せんと試むる事には、抜目なかり



き斯かる思索の痕跡は今日尙教會の教理の中に認むるを得べし。然れども創造説は終に凱歌を奏したり。此點に於ては基督教は眞の勝利を得たるなり。救世主の神人兩性説に關して正當なる判斷を下すは、創造説に於けるよりも遙かに困難なり。此説は疑もなく希臘教々理の中心點にして、三位一體の教理は之より出でたるあり。而して基督教の教理は要するに此二點に歸すべしとは希臘教の理解する所なり。曾て希臘教會の教父が「神人兩性の觀念即ち神人となれりとの觀念は實に斬新中の斬新なる者然り天下唯一の新しき者なり」と曰へるは實に希臘教徒の思想を正しく代表せるのみならず、之と同時に健全なる思想と眞面目なる省察とに由り、凡の他の教理を棄つるとも此點のみは決して捨つべき者に非ずとの彼等の意見を極て見事に表白せる者なり。希臘教會の神學者等は、基督教の信仰的教理と自然哲學との唯一の相異點は前者が神人兩性の教理即ち三位一體の教理を有する事なりと確信せり。若し強ひて此教理と相並ばしむべき稍々大切なる者を擧ぐれば、唯だ天地創造の思想あるのみ。

若し然りとせば神人兩性説の起源、意義及び眞價を正當に了解する事は頗る大切なる事なり。此教理たる始めて福音書より來れる者をして甚だ異様の感覺を有せしむべし。此感覺は歴史的研究に由ては除く能はざる者なり。何となれば教會に於ける基督論の全部は歴史に現はれたる耶穌基督の人格以外に立つ者なればなり。然れども歴史的考察は能く此説の由來を説明するを得るのみならず、或度まで此説にも正當なる理由ある事を知らしむるを得べきなり。今其要點を明かにせんとす。

吾人は以前の講演に於て加特力教會の牧師等が基督の本性と眞價とを確定せんが爲に、ロゴスの觀念を撰びたる事を論せり。抑々メシヤなる概念は彼等には全く了解せられざりし所隨て無意義なりしが故に、而して吾人は即座に概念を作るを得ざるが故に、彼等が取るべき途は三者の中一を撰ぶの外あかりき。第一基督を神に化したる人即ち英雄となすこと、第二基督の本性を希臘の諸神の性質に隨て考ふる事、第三基督をロゴスと同一視すること。是なり。此中始の二は異教的なりしが故若くは然か見えたるが故に排斥せられざるを得ざりき。されば殘るは唯だロゴスの觀念のみ。此觀念は多くの點に於て甚だ便利なりし事は、余輩が既に示したる所なり。——神の子なる觀念も亦ロゴスの觀念と一致するを得たり。而かも忌むべき神傳に陥るの憂なく、又之に由りて一神教を危くするの恐なかりき。——然れど



も、ロゴスの觀念には一種特有の論理ありて、之に由りて怪しからざるにも非ざる結果を生じたりき。元來「ロゴス」の觀念は色々の形に鑄造するを得べかりしが故に、此觀念の中には莊嚴なる内容あるにも拘はらず、此觀念の實現者たる耶穌は完全なる神性を有する者に非ずして、半神半人の者として了解するを得べかりき。

「ロゴス」たる基督の性質を如何せば一層精確ならしむべきやとの問題は、若し同時に極めて精確なる贖罪の觀念が勝利を得て、絶對的要求を爲さざりしならんには、斯くまで重き地位を占むるに至らで、人間省察の力に由りて之を鎮靜するを得たりしなるべし。贖罪と曰ふ中には罪の教、惡鬼の力より救はるゝ事、其他種々なる觀念あるが中に、第三世紀に於て教會の内に一種の贖罪の觀念が大に勢力を占むるに至れり。即ち基督の贖罪は死より贖はるゝ事、隨て神の如き生活に上げらるゝ事、即ち化神なりとの觀念是なり。此觀念は福音の中に確かなる根據を有し、又パウロの神學の保護する所たり。然れども此觀念の形式に至ては、二者と異にして、希臘的思想に出でたる者なり。即ち此贖罪の思想に由れば、死其者は實に最大の害惡にして、又一切害惡の原因なり。而して最高の幸福は永生を有する事たるあり。此思想が如何に希臘的あるかは次の二點に由りて明かなり。第一、死より贖はるゝ事を全く

藥學的に考へたる事、即ち神の性質流れ入りて死すべき性質を改造する者なりとせし事、第二、永生と化神とを同一視したる事是なり。若し斯の如く、贖罪に於ては人間本性の中に、或者の入來を要し、又化神する事を要すとせば、贖罪者は唯だ神たるのみならず、人と爲れる神ならざる可らず。彼の驚くべき思想上の變化は、唯だ斯の如き事情の下に起るを得べし。言語と曰ひ、教理と曰ひ、將た事業と曰ひ、此點に關しては何をも爲す能はざるなり。何人か説教に由て石に生命を與へ、死すべき者を死せざる者と爲すを得んや、唯だ神の性質が死すべき者の中に注入せらるゝ事に由りて、始めて斯かる變化を爲し得べきなり。然るに神の性質即ち永生を他人に與ふる事を得る者は、英雄に非ずして、唯だ神のみなるが故に、「ロゴス」は神なると同時に、又人と爲れる神ならざる可らず。此二條件にして成立せば、茲に始めて眞正なる自然的贖罪即ち人類の化神なる者起り得べし。之に由て數百年間「ロゴス」としての基督の性質に關して大爭論ありたる所以を了解すべく、又之に由て、アタナシウスが「ロゴス」なる基督は、父なる神と同一なりとの信條を熱心に辨護せし事、恰も基督の死の問題なるが如くありし所以を説明するを得べく、又之に由て、希臘教會の他の教師等が、贖罪者に於ける神人兩性の合一を否定せんとする者若くは之を以て唯



だ、道徳上の合一に過ぎずと爲す者を、凡て基督教の破壊者なりと考へたる所以を知るべし。彼教師等が固く抱持したる信條は、彼等の爲には決して煩瑣的思想に非ずして、基督教を他の宗教の如く不満足なる者とならしめざる爲めに、缺くべからざる事實を表白し又確立したる者なりき。三位一體の教理——彼等が如何にして聖靈の教理に達せしやに就ては、今茲に曰はざるべし——及び贖罪者の神人兩性の教理は、贖罪を以て靈魂不滅に由れる人性の化神なりと爲す一種特別なる思想に適中する者なり。若し化神の觀念なかりせば、決して彼信條に達する能はざりしなるべし。然れども此觀念は、彼信條と共に起れるが如く、又共に倒るべき運命を有せり。然るに彼信條が抱持せられし所以は、希臘哲學と親近せるが故に非ずして却て之と反對の思想を有したるが故なり。希臘哲學は靈魂不滅に對する強き願望に處するに、教會が爲せし所と同様なる歴史と省察とに由らん事を試みざりしのみならず、斯の如きは其夢想だもせざりし所なりき。一個の歴史上の人格及び其現出が斯の如く宇宙の事に干渉し、又彼が一度與へたる印象が永遠に流るゝ一大變化を起したりと曰ふが如きは希臘哲學より見れば神話若くは迷信に外ならざりき。『天下唯一の斬新なる者』の思想は、希臘哲學には最劣等の小説の如く見えたるべし。

然り、斯く見えたるは事實なりき。

希臘教會は今も尙此等教理の中に基督教の眞髓が秘密として、又已に開かれたる秘密として維持さるゝ事を確信せり。此確信を批評するは難きに非ず。吾人は先づ希臘教會の爲に次の事を承認せざるべからず、即ち彼教理は基督教を希臘の宗教哲學に溺れしめざる様強く保護したる事、又基督教の絶對的性質が此等の教理に由て甚だ明瞭となり、深き印象を人に與ふるに至れる事、又此教理は希臘の贖罪的思想と相合する者ありたる事、而して終りに此觀念は根據の一を福音の中に有せし事是なり。然れども之より以上吾人は何者をも承認する能はざるのみならず、恐らくは斯の如く曰ふを得べし。第一、贖罪とは死すべき性質を神化する事なりとの思想は、基督教以下の思想たり。何となれば此思想に由れば、宗教に必要なる道徳的要素は、唯だ別に追加するより外なればあり。第二、此全教理は是認すべからず、何となれば是れ福音に於ける耶穌基督と殆ど係りなく、又其信條も耶穌の心に適はざる者、隨て眞理にかざる者なればあり。第三、此教理は吾人を基督より遠ざくる者あり、何となれば此教理に由れば、人と眞の基督との結合は甚だ不確實なればなり。此教理は耶穌の生ける影像を有せず、唯だ理論的文章に現はされたる空しき假



定によりてのみ耶蘇の影像を承認すべき者なる事を要求せり。斯かる顛倒が左に  
 有害なる結果を生ぜざりし理由は、主として教會が未だ福音書を壓伏せず、又福  
 音書が本來の力を現はしたるに由る。吾人は人とされる神てふ觀念が、至る所に魔  
 力的秘密の如く働きしのみならず、神、基督の中に在りこの明確なる信仰に達せし  
 めたる事を承認するを得べし。吾人は又靈魂不滅の願望には利己的分子あるも、他  
 方には神と共に生き、又神の内に生かんとする願望と、常に神の愛を離れざらんと  
 する慾望とあるが故に、之に由りて道德的純潔を保つを得べき事を許すを得べし。  
 然れども吾人は希臘教の教理の中には、靈魂不滅に對する古代的希望と基督教の  
 使命との間に、宿命的關係の結ばれたる事を否定する能はざるなり。又希臘の宗教  
 哲學及び其知識主義の中に置かれたる此宿命的關係が、人を不正當なる信條に導  
 き、案出したる基督を以て生ける基督に換へ、正しき信條を有する事は即ち宗教の  
 眞髓を有する事なりとの自ら欺ける斷定を造りし事は何人も打消す能はざるべ  
 し。神學上より見れば基督論的信條は、或は當を得たる者ならん。然れども教會が、人  
 は第一に耶蘇基督が神人兩性と二の意志とを有する一の「ペルソナ」なる事を承認  
 せずんば、彼は基督と係りなきのみならず、基督に向て罪を犯したる者、隨て放逐す

べき者なりと公言するに至りては、福音を距る事如何に遠きぞや。知識主義は終に  
 斯の如き要求を爲すに至れるなり。斯くても尙カナン（太二十五の二）の婦（太二十五の二）若くはカベ  
 ナウン（太二十五の二）に於ける百夫の長（太二十五の二）以下（太二十五の二）に關する福音書の記事を讀んで平然たるを得る  
 か。

然るに茲に傳説主義及び知識主義と結合せる第三の要素あり、儀式主義（太二十五の二）是あり。宗  
 教が唯だ少數の人の外は實際信奉する能はざる程の廣大なる傳説的教理として  
 現はるゝや、斯かる宗教を多數の信徒に與ふる唯一の途は之を儀式と爲す事ある  
 のみ。此に至れば教理は固着せる信條となり、之に伴ふ行爲は唯だ其符號たるのみ。  
 而して教理は其眞意を了解せらるゝ事なく、唯だ秘密なる者として感せらるゝの  
 外なし。深玄幽邃言ひ難く了解し難き未來の希望たる神化（太二十五の二）すらも、今は儀式的行爲  
 に依て現在の手附金の如く取扱はるゝに至れり。此かる教理を受入るべき性情は  
 想像と情操の興奮にして、此興奮愈々強ければ此教理を受入れたる證據物たるを  
 得べし。

是れ即ち希臘教徒の感ずる所なり。神との交通は秘密的禮拜、大小數百の實行的信  
 條、符號、畫像及び祭祀等に依て成立する者とせらる。若し此等の事を嚴格に遵守す



る所あれば、之に由て神の恵を受け永生に入るを得べし。信徒は教理を知らず、教理は唯だ祈禱文として現はるゝのみ。斯かる信徒の百分の九十九までは、宗教と云へば唯だ儀式を知るのみにて、宗教は唯だ儀式に由て人に現はれたりき。而して心靈上進歩せる信徒も亦斯かる儀式の絶対的必要を認めたりき。何とあれば、教理は唯だ斯かる信徒に依て、始て正當なる應用と結果とを生ずればなり。

思へば、基督が靈と眞を以て神に事へたる事より一變して、符號と信條と偶像とを以て神に事ふるに至りしこと程、世に悲むべき事はあらず。此恐るべき結果を知らんと欲せば、希臘教會の中にて宗教上知識上全く劣等なる地位に立てる「コプト」人及びアビシニア人に行くを要せず。シリア人希臘人及び露西亞人を見れば已に充分なり。何となれば此等國民は全體より見て彼蠻民に勝る所なければなり。或は宗教的儀式を以て神秘的作用と爲し、之に服従せざる可らずと教え、或は儀式を嚴守し畫像を掲げ、格言及び信條を既定の仕方に従て唱へざる可らずと命するが如きは、基督の教訓中何れの處にか其痕跡を見出すを得んや。耶蘇基督が十字架に釘けられしは、此種の宗教を破壊せんが爲めならざりしか。然るに豈に圖らんや、基督の名と其權威の下に、斯かる宗教の再興を見んとは、元來神秘論は希臘の教理より

起り、之に伴ひて教會に入來したる者なるに、事實に於て教理は既に地下に沈み、獨り神秘的なる儀式のみ全盛を極めたり。彼教理は假令如何に造られたるにせよ、兎に角精神的要素なりき。基督教も茲に至れば古代最劣等の宗教に退歩せるあり。斯の如くして希臘を始め東洋に擴がれる廣大なる基督教國に於ては、精神的宗教は殆ど儀式主義の爲に窒息するに至りぬ。之に由りて基督教は重大なる一要素を失へるのみならず、全く異種類の者となりぬ。即ち「宗教は儀式なり儀式の外には宗教なし」と曰へる階級に入りぬ。

茲に希臘及び東洋の基督教の中には、傳説主義、智力主義及び儀式主義の聯合に向て數百年の間、一定の抵抗を爲すを得たる一要素あり。此抵抗は今日も尙所々に見らる所なり。即ち遁僧制度是なり。人若し希臘教會の信徒に向て、如何なる是れ最高の意味に於ける基督信徒なるやと問はば、遁僧ありと答へしなかん。沈黙と純潔を修する者、世界を遁るゝのみか此世の教會をも遁るゝ者、虛妄なる教理を避くるのみか正統の教理を語る事をも避くる者、己が目に神の榮光の輝くを見る迄、斷食、瞑想、心を動さずして待てる者、平靜なる生活と永遠を思ふ事との外は何物をも貴とし



と思はざる者、人生に對する唯一の希望は唯だ死のみある者、斯かる完全なる無我と純潔との中より慈悲の心の湧き出づる者、是れ即ち希臘教會に於ける理想的基督教徒なりき。斯かる人には教會もそが行ふ所の儀式も左まで大切なる者に非ず。彼等の眼中には聖なる世俗なる者なかりき。教會は斯かる隱遁者ありしが爲め、強くして又優しき宗教的感情の現象を呈するを得たりき。此現象や神聖にして、兎に角基督の像の一面を摸倣せんとする靈的活動に滿ち、吾人をして此處には眞の宗教あり、此宗教こそ基督の名に耻ぢざる者なれと曰ふを得せしむる者なりき。余輩新教徒は一概に遁僧制度を非難せざらん事を要す。新教々會の成立の事情は遁僧制度に對する余輩の判斷をして冷刻と偏頗とに失せしむる者あり。假令今、目前の問題に向ては或は斯かる斷定を下すこと正當ならんも、他の關係に於ては特別の説明なくして同一の論鋒を應用すべき者に非ざるなり。實に傳說的、儀式的、世俗的なる希臘教會の中におりて、斯かる傾向に反對する、麪酵とも曰ふべき者は、唯だ一個の遁僧制度ありしのみ。此處には自由あり、獨立あり、又生ける經驗もありき。宗教に於て貴き者は唯だ經驗と靈的生活のみなりとの知識が眞に承認せられたるも亦此處なりき。

然るに惜むべし、世俗的教會に對して遁僧制度が爲したる貴重なる働も、今や殆ど消滅に歸しぬ。且そが造り得たる祝福も最早殆ど痕跡を留めずなりぬ。其原因を尋ねれば獨り世俗的教會が跋扈して遁僧制度を屈從せしめ、至る所權力を以て之を束縛したるのみならず、俗風大に遁僧院を襲ひたるが故なり。今日となりては希臘及び東洋の遁僧と曰へば、教會中最劣最惡の動作、畫像と寶物の尊重、劣等なる迷信及び暗愚なる妖術等の機關たるを常とす。素より之には例外なきに非ず。遁僧の將來には比較的に光明ある希望の常に懸るあり。然れども教會が假令何を教へんと欲するにもせよ、信徒等が儀式を嚴守するを見れば是れ即ち基督教的信仰なりとして満足し、又彼等が正しく斷食を爲すを見れば是れ即ち基督教の道德かりとして頗くが如き有様にては、教會の改良は終に望むべからざるなり。

終りに問はんとす、福音は希臘教によりて如何に變せられしや、又如何に其本領を維持せしや、之に對する第一の答には何人も異存なかるべし。即ち僧侶と曰ひ、儀式と曰ひ、凡ての器物、衣服と曰ひ、聖徒の崇拜及び其畫像と曰ひ、或は呪祭典及び斷食制度と曰ひ、凡て斯の如き者を包含せる役、人的教會は、基督の宗教と何等の關係を



も有せずと爲す事是なり。此の如き者は要するに古代的宗教に福音の一二の思想を添附したる者にて、若し之を以て福音を吸収したる古代的宗教なりとなさば更に適當ならんか、希臘教會が生出したる如き宗教的情操、若くは此種の宗教を歓迎する所の情操をも尙宗教的と呼ぶを得るとせば、そは基督教以下に位する宗教的情操たるなり。傳説主義及び「正統主義」も亦福音と共通なる點甚だ少し。是れ亦福音より來れるに非ず、否、福音より來る能はざる者たり。吾人は素より正當教理、敬虔、服從、畏敬等を以て貴重なる者、人心を高尙ならしむる者と爲す、又之を以て個人を結合、制馭して強固なる團體を造るに當り殊に必要ある者となす、然れども、それが個人の自由のある所、即ち神に對する服從、背反の別るゝ點に於て、人心に接觸せざる間は、福音との關係を認むる能はざるなり。之に反し、遁僧制度にありては、遁世、冥想以て神に事へんとする斷乎たる決心の點に於て常に比類なき貴重なる者を有せり。例令此處には基督の教訓が一方に偏し、或は其應用に制限ありたりとするも、尙其教訓は生活の指針として仰がれ、個人に獨立的靈火を燃すを得るに庶幾かりき。然り之を爲すを得るに庶幾かりき。余は神に謝す、希臘教會の破屋の中にも靈的生命的火は全く消えやらず、基督の教訓は尙教會を訪づる人の耳に響くを得るを、復

雜なる組織を有する教會に對しては、既に語れる所よりも穩便なる語を呈する能はずと雖も、教會に於て最も多とする點は、教會が少しなりとも福音の知識を正當に受入れたる事なり。耶蘇の言葉は獨り僧侶の獨唱に委せられたるに止まらず、教會の中にも最高の地位を占め、其中に含まれたる靜かなる使命は妨げらるゝ所なかりき。一方には無用の殘物たる儀式を有する呪組織まじりと感情の發揚とありしも、他方には耶蘇の言葉の之と兩立して私に或は公に人の讀む所となるありて、迷信も其力を奪ふ能はざりき。深く教會の内部に立入りて觀察する者は斯の如き果實を認めざるを得ざるべし。僧俗二級に別れたる基督信徒の中にも神を慈愛の父、生活の指導者と仰ぎ、又深く耶蘇基督を愛慕せる者もありき。之を愛慕するや耶蘇が神人兩性てふ深き秘密ある「ペルソナ」たるが故に非ず、耶蘇の本性の光が福音の中より彼等の心に入り來り、其生活に光と熱とを與へたるが故なり。東部にありては父なる神の攝理てふ思想は、稍ともすれば宿命的形式に陥り、殆ど人心を沈靜せしむる者なりしも、之と同時に此思想が人に力と愛と無我とを供給せし者なる事明かり。之を證明するには再びトルストイ伯の「村落物語」を示せば充分なりとす。此物語は事實を修飾したる者に非ず、余も亦直接に見し所、經驗せし所に依りて露國の



農夫或は低き僧侶の中にも、畫像及び聖徒の崇拜と相並んで神に對する單純なる信仰と、優しき道德的感情と、福音より出でたりと認めらるゝ強き兄弟の愛との存することを保證するを得るなり。斯かる精神の存する所には、全體の儀式的禮拜も、皆靈的意義を有せるなり。其此處に至れるは之を記號的に解釋せるが故に非ず、斯の如きは餘りに人爲的なり。心一度神に觸るれば、假令偶像の前に立つも生ける神に對するが如き感覺を起すを得べきを以てなり。

希臘教會の信徒にして能く獨立なる宗教的生活をなせる者が、信神、謙遜、無我、慈愛能く耶蘇基督を畏敬するに至る事は實に偶然の結果に非ず、何となれば斯の如きは要するに福音の未だ死せずして、其實質が宗教的、道德の中に存する事を示す者なればなり。

希臘教會は全體より見るも構造より云ふも、福音との因縁甚だ淺き者たり。此組織は基督教の實際的變革を意味するのみならず、宗教心が遙かに劣等なる階段即ち古代的階段に下れる事を意味す。唯だ其一部分たる遁僧制度、殊に俗的教會に服従せず、又自ら俗化せざる所の遁僧制度のみは能く全教會組織をして、己に對し第二

流の地位に下らしめ、又基督教的獨立を實現せしめたる一要素にてありき。吾人の殊に注意すべきは教會が斯くても尙福音を壓伏せず、僅かながらも人をして之に接せしめ、以て教會の中に尙矯正的勢力の存するを得せしめたる事なりとす。福音は教會の中に於て、或は教會と相並びて、各個人にそが獨特の働を示したりき、而して其働は耶蘇の教訓中、最重要の者と同質の宗教として現はれぬ。斯の如くして福音は希臘教會の中にも全くは滅びざりき。人の靈は尙神との結合及び神に於ける自由を感じたりき。此を感じたる者は各基督教徒が了解して、同情、同感を起す所の言語を語るを得しなり。

## 第十四回

### 羅馬教會に於ける基督教

羅馬教會は吾人の知る所によれば、歴史が生産したる者の中にて最も廣く、最も強く、最も複雑にして、又最も統一的なる一大組織なりとす。人間の凡ての智力も、心靈の力も、人の使用し得べき一切の原動力も、悉く此が建設の爲めに注がれぬ。羅馬教



は其多面なる點に於て、其結合の強固なる點に於て遙かに希臘教を凌駕せり。吾人は例により次の問題を掲ぐべし

- (一) 羅馬教會は何を爲せしや
- (二) 羅馬教會の特色如何
- (三) 福音は羅馬教會に依て如何に變せられ、又如何なる者として存在せしや

(一) 羅馬教會は何を爲せしや——羅馬教會は第一に羅馬、日耳曼の國民を教育したるが、其教育たるや希臘教會は希臘人、スラブ人及び東洋人を教育したる者と、其趣を異にせり。素より羅馬、日耳曼の國民が其先天的性質と根本的歴史的關係とに由りて其隆興を助けられたるは疑なきも、之に由て羅馬教會が爲したる助力の功績を減すべきにあらず。羅馬教會は幼稚なる國民に基督教的教育を施せり。而かも一度施して後は之を放任し、何時までも之を進歩の初段に留めたるに非ず。更に進歩して已まざる者を彼等に與へ、加ふるに殆ど一千年の久しきに亘りて自ら其進歩を嚮導し來りぬ。實に十四世紀に至るまでは教會は彼等の教導者、又其母にてありき。教會は彼等に思想を與へ、目的を與へ、而して又力を與へたりき。余は之を十四世

紀までと言ふ、何とあれば其より以後は教會が教育したる國民等は各自獨立して、教會の精神に反對せる方向に馳せられたるなり。然れども爾來六百年の間、希臘教會の如く依然として舊時の状態を更めざるが如き事なかりき。其間稍々短き斷絶ありしも、教會は終に全然政治上の運動を爲すまで、に充分の發達を現はし、獨逸に於て盛んに其例を見る——又精神上の運動に於ても常に雄大なる事業を成したりき。假令教會が最早國民の教導者に非ずして、却て進歩の妨害者たりし事既に久しと雖も、現今文明の進歩に伴ふ種々なる誤謬と事物の轉倒とに對しては教會の加へたる妨害が必ずしも不幸にあらざりき。

第二に教會は西部歐洲に於ても見るべかりし、宗教に對する國家全能主義に反對して、宗教及び教會は宜しく獨立すべしとの主義を固く維持したりき。既に語れるが如く希臘教會に於ては宗教は國體及び國家と兄弟の關係を結び、公共の禮拜及び遁世的生活を除きては國家に對して獨立すべき餘地を有せざる程なりき。然るに羅馬教會にありては其事情全く異なれり。即ち凡そ宗教に關する事及び之と提携せる道德界の事は國家に對して獨立の版圖を有する者となし、之を侵害せらるゝを許さざりき。是れ吾人が特に羅馬教會に謝する所なり。



以上二個の事實は羅馬教會が爲したる、又其幾分を現に爲しつゝある事業中、最も較著なる者なりとす。第一の事實に制限ある事は既に之を曰へるが、吾人は第二の事實にも一の制限あるを感ず。追て之に論及すべきなり。

(二)羅馬教會の特色如何——是れ即ち第二の問題なり。若し余が見る所にして誤らずば、此複雑なる羅馬教會は要するに三個の要素に歸するを得べし。第一は希臘教會と共通なる者、即ち加特力教たる事。第二は羅甸思想と羅馬帝國との繼續者たる羅馬教會。第三は聖オーガスチンの精神と其宗教的感情を受けたる事なりとす。オーガスチンは靈的生活及び宗教的思想の範圍に於て羅馬教會の祖師となれり。管に彼が多くの後繼者に由りて幾回となく現はれたるのみならず、彼に由りて目を醒まし、靈火を燃されたる數多の人等は宗教心と神學とに於てこそ獨立せる所あれ、其精神に至りては全然オーガスチンの精神に外ならざりき。

曰く加特力教、曰く羅馬帝國てふ意義に於ける羅甸的要素、曰くオーガスチンの精神、三者相寄つて羅馬教會の特色を構成せり。

第一の要素に付て之を曰へば、如何なる希臘教徒と雖も羅馬教會が異議なく之を受納せし點に於て、今と昔も變らざるのみならず、若し唯だ法王と彼が使徒的最高

權とをさへ承認すれば、何れの希臘教會とも直に合同するを得べきは諸君の知る所ならん。希臘教徒に向て羅馬教會が要求する條件の如きは全く有名無實のみ。彼等が自國の言語を以て神を禮拜するも、妻帯せる僧侶を有するも、羅馬教會は異議を唱へざるなり。若し夫れ新教徒にして羅馬教會に轉入せんとする者が如何に「清め」を受けざる可らざるかを思はば、思半ばに過ぐる者あらん。試に思へ、若し教會が新たなる信徒を入るゝに當り、殊に他の宗派より之を入るゝに當り、主要の條件を置て問はざるが如き事あらば、是れ教會が自ら欺ける者に非ざるなきか。然るに羅馬教會が希臘教會に向て斯の如きを見れば、二者共通の點や重大なる所に存し、唯だ法王の主權をさへ承認せば、兩者の合同は成立する程の者たるを知るべし。事實に於ても希臘教會の特色は即ち羅馬教會の特色にして、羅馬教會は往々甚だしく希臘教會の特色に重を置きたりき。即ち傳説主義、正統主義及び儀式主義の羅馬教會に行はれしは、毫も希臘教會と異なる所あかりき。唯だ高尚なる思想上の點に於て軌を一にせざる所ありしのみ、通僧制度に於けるも又然り。

余輩は高尚なる思想上の點に於てと曰へり、之に由て吾人は既に第二の要素に移れるなり。即ち羅馬帝國てふ意義に於ける羅甸的精神是なり。古き以前より既に基



督教國の西半に於ては羅甸的精神、即ち羅馬の精神が一般の加特力教に一種獨特の變化を與へたり、第三世紀の始より以來、羅馬の教父等は救濟は其種類の如何を問はず、一定の條件を有する條約の形に於て與へられ、又此條約を守る事の度に應じて與へらるゝ者なりとの思想を有したりき。

此條約を結ぶ事に由て神は其慈愛と寛容とを現はしたれど、之と同時に神は愈々熱心に其條約の果して守らるゝや否やに注意せるなり。次に聖書と傳説とを問はず神の默示は悉く法律にして、且此傳説は一定の階級及び其正當なる後繼者にのみ固着する者とせられたり、而して神の秘の隱るゝ所は聖禮典なりとす。聖禮典は一方に於ては人の義務的動作なれども、他方には一定の制限内に正確に與へらるゝ恩賜を含めり。又懺悔の規律は法律的に定められ、民法上或は訴訟上の手續と異なる所なし、而して教會は一個の法律上の組織なるが、此組織たるや救拯の保全及び擴張の傍ら他に必要ありたるが爲のみならず、そが保全擴張其者の爲に造られたるなり。然れども教會が法律上の組織なりと曰ふは唯だ教會の憲法に就て曰へるなり。今吾人は簡單に此憲法に關して説明せざる可らず、抑も此憲法の根本主義は東西兩教會が共有する所たり。彼君主的監督の發達せし後、教會は羅馬政府の行政に倣ひ

て其憲法を定めんとせり。即ち羅馬帝國の地方的區分法に倣ひて羅馬教會の版圖を分ち其上に監督長を置けり。此監督長の任に當る者は常に一州首府の監督なりき。希臘教會に於ては更に歩を進め、各州の大統一を爲したるテオクレシアン帝の國土分割法に倣ふ所ありき。希臘教會に於ける教長制度は斯の如くして成立せるも、嚴格に實行さるゝに至らず、幾分か他の事情の爲に妨げられたりき。

羅馬教會にては教長制度に基ける區分法を採用するに至らずして、全く異なる事情の入り來れるあり。第五世紀の頃、西羅馬帝國は内部の衰弱と蠻夷の侵入とに依りて終に滅亡したるが、其中未だ亡びざりし者は羅馬教會に隠れて其保護を受けたりき。何をか未だ亡びざりし者は曰ふ、曰く羅馬の文明、曰く羅馬の法律、曰くアリオン派の信仰に反對せし正統的信仰是なり。蠻夷の酋長等は自ら羅馬皇帝となりて空しき宮殿に入らんとはせず、却て地方の諸國に於て其國を建てたり。斯かる事情の下に羅馬の監督は過去の事物の保護者として、又未來の事物の避難所として立つに至れり。是に於て蠻夷に占領せられたる地方、殊に従前は羅馬に反對し傲然獨立を唱へたる地方に於ては、至る處監督と俗人の別なく、羅馬にある監督を仰視するに至りぬ。地方に於ける羅馬的要素にして蠻夷及びアリオン派の人等の手



に觸れざりし者は——而して其數は少からざりき——皆教會の物となり、同時に羅馬の監督の保護の下に置かれたり、彼は羅馬皇帝消滅後に於ける最高の羅馬人なりき、然るに第五世紀に於ける羅馬監督の椅子の上には時の休徵を知りて之を利用したる人の坐せるありき、羅馬教會は斯の如くして、隱然羅馬帝國の地位に登りぬ、されば羅馬帝國は事實に於ては未だ滅びずして、羅馬教會の内に生存したるなり、然り羅馬帝國は亡びたるに非ず、唯だ其形を變じたるのみ、故に羅馬教會は取も直さず羅馬帝國が福音に由りて聖別せられたる者なりと曰ふも——是れ現今も尙應用するを得べき者たり——決して冗談に非ずして、一個の歴史上の事實を最も適切に又最も有力に説明したる者たるなり、見よ羅馬教會は尙依然として國民を支配せるなり、法王は即ちトラチャン帝若くはマークス、オーレリウス帝の如く君臨し、ロムルス及びブレムスの代りにペテロあり、ポーロあり、地方長官の代りに監督長あり、監督あり、僧侶及び遁僧は羅馬の聯隊に象り而して、耶粹土教は近衛兵に擬せり、實に羅馬教會は律法の一畫より衣服制度の如き細末の點に至るまで羅馬帝國と其組織とを繼續せる者なるを見るべし、此の如くして、羅馬教會は福音的教會の如くならず、又國民的なる希臘教會の如くもあらず、一個の政治的教會

會とはなりぬ、而して此政治的教會は羅馬帝國の繼續者なれば、流石に大袈裟なること此世の王國の如くならず、即ち法王は自ら王と稱し、或は最高監督と呼びて、カイザルの後繼者たり、教會は既に三世紀、四世紀に於て全く羅馬的精神を以て満されしが、今や更に一大轉歩をなし、羅馬帝國を教會内に再建するに至りぬ、七八世紀以後今日に至る迄羅馬、以太利に於ける忠義なる加特力教徒の了解せる所も之に外ならず、法王グレゴリー七世が皇帝と不和を生せし時、以太利の某主教が彼を煽動したる詞は次の如くなりき。

取れや昔の使徒の劍、

閃めくペテロの劍取り、

起ちて無法の蠻人の

猛き力を打破れ、

昔負ひにし其軛、

長へまでも負はしめよ。

血の河流してマッウスや



シーザーが爲せし功績も、  
汝が口より出づるある  
唯だ一言にて成りぬべし。  
破門の力を恐ろしき。

汝が再び興しける

ローマは汝に感謝せん、

彼が捧げし寶冠を

戴く者の其中に

汝に勝れる者やある、

シビオが勝利も何のその。

此歌を捧げられし者は誰ぞ監督なるか抑も又カイザルなるか然り余はカイザルなりと思ふ若し之を祭司的カイザルと曰はば更に適切ならんか是れ當時の人の所感にして又實に今日の所感たるなり彼法王は實に一帝國の君王にてありきされば此帝國を攻撃するに獨斷的議論の武器を用ゆるが如きは空手敵を打つ類

のみ。

羅馬教會は即ち羅馬帝國なりとの事實より生ずる莫大なる結果に付ては余は今茲に論及するを得ざれば唯だ教會が自ら擧ぐる所の一二の結果を示して止まんのみ。政府的權力は福音の宣傳と相並んで羅馬教會の本領たりしを以てかの「基督は勝ち、基督は治め、基督は凱旋す」との詞の如きも政治的意義を有したりき。羅馬教會は以爲らく羅馬教會が國家に倣ひ法律と腕力とを以て世を支配するは取りも直さず基督が自ら世を支配する事なりと。是に於てか敬虔なる宗教家と雖も第一に法王の教會に服従し、彼の嘉納する所となり、永久に教會に依頼する事をせざる以上は教會は其基督教的信念を認めざりき。教會は其信徒即ち「臣民」に次の如く言ふ事を教えたり。曰く「假令我凡ての奧義に達し凡ての信仰を懐き凡ての所有を施し燒かるゝ爲に我が身體を與ふるとも、若し教會に對する全き服従より流れ來る愛に由る一致なくば我は何をも有たざる者なり」と。されば凡ての信仰、凡ての愛、凡ての徳、否、凡ての秘密も教會を離れては何の價をも有せざるなり。而かも驚く勿れ、教會が斯く教ゆるは自然の勢のみ。此世の國家を見ずや。そが尊ぶ所は國家の爲に盡されたる事業なるに非ずや。羅馬教會なる國家は自ら以て天の王國なりと思へるも、其爲



す所を見れば全く此世の國家と異なる所なきなり。是に於て諸君が羅馬教會の全要求の由來を知る事、最早や難きに非ざるべし。即ち如何に奇怪に見ゆる現象も「羅馬教會は神の國あり」又「羅馬教會は此世の國家の如く世を統治すべき筈なり」との二言によりて氷解するを得べし。凡て斯の如き結果を生ずるに至りたる事には基督教的動機亦與つて力ありし事を否定す可らず。所謂基督教的動機とは他に非ず、基督をして人間の實際的生活に關係せしめ、基督教をして吾人一切の關係を貫かしめ、個人のみならず諸國民を救済せしめんとする事是なり。熱心なる羅馬教徒にして基督の天國を地上に建設せんとする事の外、他に願望なかりし者何ぞ其多かりしや。斯かる高尚なる目的と之を遂ぐるの力とに於て、羅馬教會が希臘人に卓越せるは曰ふ迄もなしと雖も、その政治的方法に由て神の國を組織せんとしたる事は基督及び使徒等の教を誤解するの甚だしき者なる事明かなり。神の國は宗教的、道德的勢力の外、何の力をも知らず、唯だ自由を基礎として立てるのみ。然るに今や教會は此世の國家として現はれたるが故に、此世の國家が爲す所は狡猾なる政略と腕力とを問はず、凡て之に倣ふを辭せざりき。何となれば此世の國家は假令法治國たりと雖も、場合に依りては尙法律に違犯せる國家たる事あればなり。斯くて教

會が蹈み來りし發達の直接の結果は即ち法王の君主獨裁主義と、法王は神聖あり過を爲さずとの思想とにてありき。何となれば世俗的神政體に於ては「過を爲さず」とは國家の上に全權を有する事に外ならざればなり。然るに教會が何の躊躇する所もなく、此最後の結論に達せしを見れば、教會が如何なる邊まで俗化せしやを知るに足らん。

第二要素の爲に西部加特力教の特色たる傳説主義、正統主義、儀式主義及遁僧制度が大に變更せざるを得ざりしは明かなり。傳説主義は尙依然として存したるも、若し不便を感じる點あらば取て之を除き、法王の意志を以て之に代ゆるを得たりき。我は即ち傳説なり」とは實に法王バイヤス九世の叫びし所なりき。正統主義も亦重要な地位を占め居りしも、事實に於て法王の政略は勝手に之を變更するを得たるなり。或は巧妙なる判斷に依り教理の意義を改めたる者少からず。或は新教理の加へられたるもありき。而して教理は多くの點に於て屈伸自在の者となり、神聖動かすべからざる信條も、倫理と懺悔所とに於ては之に背反するを妨げず、嚴然たる舊來の制限も一として現在の必要に應じて弛むるを得ざる者なかりき。儀式主義、遁僧主義に於けるも亦然り。余は今遁僧主義が如何程まで變化せしや、其變化は必ずし



も損害のみに非ざりきに關し、且そが従前の者と反對の性質を有する一大現象と化せし事に關し語るの暇を有せざるなり。教會が如何にも能く歴史的進行に適合するを得たるは他の教會の及ぶべくもあらぬ處なりき。見よ、教會は常に古かりしかど、或は然か見えしならん、而かも常に新らしくなり行けるなり。

羅馬教會の特色を爲せる第三の要素は第二の要素と正反對の者なるに、尙兩々相並んで確立するを得たるこそ不思議なれ、余は之をオーガスチン或はオーガスチン主義なる名稱を以て呼ぶを得べし、第五世紀の事なりき、恰も羅馬教會が羅馬帝國の相續者と爲れる頃、教會は深玄雄大ある一個の宗教天才を得たるが、此人物の感情と思想とは深く教會に浸潤し、教會は今も尙之を捨つる能はざるあり、斯の如くして同時に「カイザル」とオーガスチンとを有するに至りし事は、羅馬教會の歴史に於て最も重大なる又最も驚くべき事實なりき、然らば教會はオーガスチンより如何ある精神と傾向とを受けしや。

第一オーガスチンの宗教心と神學とは他なし、罪と恵と、律法に背く事と義とせらるゝ事、神の豫定と人間の宿命等に關するポーロの經驗と教理とを、彼が獨特の方式

に由りて再興せし者たるのみ。此經驗と教理とは既に數百年間遺たれし者なるに、今やオーガスチンはポーロと同様の經驗を爲し、又彼と同様の言語を以て、其經驗を現はし、以て一定の宗教的概念を造りたりき。斯く曰へばとて余輩はオーガスチンがポーロを摸倣せりと曰ふにあらず、否な二人の異點、殊に義とせらるゝ事に關する意見の相違は甚だ注意すべき價ありと爲す者なり。即ちオーガスチンは之を以て全心只だ愛と徳とを以て滿つるに至る確乎不變の状態となし、ポーロは之を以て各人自ら經驗すべき者、又靈に由りて考ふべき者とせり。諸君試にオーガスチンの懺悔録を讀まば、其内には多少文章の修飾こそあれ、是れ實に靈なる神を己が生活の磐石として、又其目的として感じ、飢え渴く如く神を慕ひ、神の外には何物をも求めざる所の一個の宗教的天才の語れる所あるを認むるを得ん、彼は己が嘗めたる辛酸も、恐怖も、又己が心の分裂も、滅ぶべき世に事ふるとも、或は一步は一步浮世の谷に沈む事も、或は情慾の爲に自由と力をも犠牲とする事も、畢竟神と交らざると、又神を信せざる事、一言すれば罪と稱する根より來る者なりとせり。之に反して此世の繫縛と己が慾情と墮落とより彼を救ひたる者、又彼に力と自由と永遠の意識とを與へたる者を、彼はポーロと同じく恵と稱したりき。彼は又ポーロと共に



恵は凡て神の働なるを感じ、又恵は基督に依りて來り、罪の赦、及び愛の精神として  
 己が心に存する事を感じ、然れども彼は罪に對しては大使徒ポーロよりも自由  
 を缺ぎ、又彼よりも多くの疑惑を有したりき。此處實にオーガスチンの語る所、及び  
 凡て彼より出づる者をして一種の異彩を放たしむる所以なり。『我は後にある者を  
 忘れ、前にある者を望みて進むなり』(三三)のポーロの格言は、オーガスチンの言  
 はざりし所なり。オーガスチンの抱ける基督教の特色は、憫然なる罪の狀態を救は  
 れ、心の慰安を得る事にてありき。彼は神の子として榮ある自由を感じるが如き事  
 甚だ稀にして、假令之を感じる事あるも、ポーロの如く之が證を爲す迄に至らず。然  
 るに罪の不幸を慰められたりとの感覺に至りては、何人も及ばざる程の強き感情  
 と人心に徹底する所の言語とを以て之を表白したるが、嘗に之のみならず、彼が語  
 る所は能く幾百萬人の心に逼り、又實に人の内情を穿ち得たる者にて、彼が與ふ  
 る所の慰安は深く人の肺肝に徹し、千五百年後の今日すら尙彼と同様の經驗を爲  
 す者其跡を絶たざるなり。見よ、今日に至るまで羅馬教會に於ける宗教的生命は、全  
 然オーガスチンの遺風を存せるなり。彼が熱情に燃されたる羅馬教會は、彼の如く  
 感じ、又彼の如き思想を抱きたり。此點に於ては多數の新教徒も亦異なる所なきな

り、罪と恵の二元的思想、或は感情と教理の混合は時勢も之を動かす能はざりし者  
 の如し。此苦樂混淆の感情は一種曰ふべからざる味を有し、一度之を経験したる者  
 は何時までも忘るゝ能はざる所なり。假令其宗教を棄つるの日あるも、此經驗のみ  
 は常に神聖なる記憶として存したりき。

羅馬教會が折しも一躍して世界的王國と爲らんとせし時、教會はオーガスチン主  
 義を採用したるが、茲には之を採用せざるを得ざるの理由ありき。當時教會はオー  
 ガスチン主義に對しては空手にして、毫も之と拮抗する程の價を有せざりしが、故  
 に、確乎たる定見もなくして、容易に其前に背を脱ぎたるなり。斯の如くして羅馬教  
 には水火混合とも曰ふべき奇々怪々の現象を見るに至りぬ。一方には儀式、法律、政  
 治を有する國家的教會あり、他方には罪と恵に對する純潔無垢の感性和教理とを  
 有する教會ありて、最も外形的なる者と最も靈的なる者とが兩々相結合する事と  
 はなりぬ。有體に之を曰へば、始より既に斯かる結合の成立せしに非ず。心の衝突と  
 戦とはもとより免るゝ能はざりし所にして、羅馬教會の歴史は斯かる衝突を以て  
 満たされたりき。されど斯かる衝突は或程度までは調和し得べく、少くとも同一の



個人に於て調和し得べきなり。唯だ斯の如きはオーガスチンの如き人にして始て爲すを得るのみ。然り燃ゆるが如き靈的生命を有すると同時に、頑強なる一個の僧侶たるを得るのみならず、猛烈なる勢を以て有形的教會の威嚴と勢力とを増進せしむると彼の如き人にして始て之を爲すを得べきあり。彼は如何にして之を爲すを得たるか、今之を説明する能はずと雖も、彼も亦此點に於て心の衝突を感じたる事なきに非ざるは疑ふを要せざるなり。吾人は茲に二個の事實を認めんとす。第一有形的教會は常に靈性的オーガスチン主義を排斥し、又之に改良と改革とを施したるも未だ全く之を排斥する能はざりし事。第二、羅馬教會に於て常に新生命を燃し宗教心をして純白、深遠ならしめたる人傑は凡て直接或は間接にオーガスチンの感化を蒙りたる者なる事是なり。九世紀に於けるチュリンのアゴバルド及びクローヂウスより十七、八世紀に於ける「ヤンセニスト」に至るまでは勿論、其以後とても加特力教會の改革者は常にオーガスチンの遺風を帯びたりき。若しトレントの宗教會議は多くの點に於て改革の會議なりしとせば、若し又此會議の問題たりし悔改と思惠の教理に至りては、十四、五世紀に於ける神學に向つて到底望むべからざる程、深玄にして且心靈的なりしとせば、吾人は之を以て全然オーガスチンの餘力

となし、彼に向て謝する所なかるべからず。素より教會はオーガスチンの恩惠説に基き、教會内に懺悔所なる者を設け、之が爲め恩惠説をして却て無効の者たらしめんとせしは事實なり。されど假令教會が一方には如何に大手を擴げ、己れに抵抗せざる者を悉く教會に受入れんとしたるも、他方には何人にも罪と惠に關して、オーガスチンの如く考ふる者に向て寛容の態度を取りしのみならず、出來得べくんば、各人が罪の重さと神に従ふの幸福とを感ずる事、オーガスチンの如く強からん事を願ひたりき。

羅馬加特力教會の重なる要素は先づ斯の如き者なり。此外尙言ふべき事多けれど、眼目は既に之にて盡きぬ。

余輩は是より最後の問題に入らんとす。羅馬教の勢力の下に福音は如何に變じ、又如何ある者として存在せしや。此問題に就ては多言を費すを要せざるあり。教會が有形的教會として神聖なる威嚴を要求したるが如きは福音と何等の關係をも有したるに非ず。是れ福音を曲げたるに非ずして全く反對の方向に走れるなり。然り羅馬教會に於て基督教は全然別路に迷ひ込みたるあり。希臘教が多くの點に於て







上教會の權力は益々増大するが如きも、内部に在りては徐々に而かも確實に教會は衰微の途に向へるなり、此點に付て尙一言せしめよ、

現今羅馬教會は政治上如何なる地位を占むるやに注目する者は、同教會の勢力が次第に殺がれつゝありと斷定すべき理由を有せざるべし、實に十九世紀に於ける羅馬教會の發達は抑も何たる偉觀や、而かも物の裏面に徹するの眼光を有する者は羅馬教會が最早飛鳥も落つる勢ありし十二、三世紀の羅馬教會に非ざるを見るべし、彼時代には物質、心靈二界に跨る勢力は全く教會の掌握する所なりしに、爾來其勢力は強さに於て非常なる退歩を來しぬ、唯だ千五百四十年より千六百二十年に至るの間、及び十九世紀中の短時期の間、暫く此傾向を支へ得たる事あるのみ、是れ獨り余輩の言のみに非ず、忠實にして眞面目なる羅馬教徒等の同じく告白する所たり、彼等は教會の統治上重要な靈的財産は最早殆ど手中の者に非ざるを知り、又之を公言せるなり、加之ならず羅馬教會固有の版圖たる「ラテン」國民の狀態は如何、其中強國と呼べるゝ者は唯一のみあるに、其れすら一世代を経たる後には、知らず如何なる光景をか呈すらん、羅馬教會は其歴史上の關係より殊に古代羅馬及び中古の歴史の關係より今日尙一國家として少からざる勢力を有し、羅匈國民

の羅馬帝國として存せりと雖も、此帝國の運命は最早長からざるべし、教會は果して時勢の變遷に對し己を維持するを得るや、隆々として進歩すべき國民の思想に對し、何時までも之に對抗するの力ありや、羅匈的國家既に地に倒るゝの後、尙餘命を保つを得るや否や、

然れども余輩は此問題を放棄すべし、吾人は寧ろ羅馬教會の中に遁僧制度及宗教的講社あり、殊に感謝すべきは「オーガステン主義」ありて、深き宗教の生命たりし事を記憶すべきなり、教會は何れの時代にも聖徒を出したるが（人間を聖徒と呼ぶを得る限に於て）今も尙之を出しつゝあるなり、教會の中には神に對する信任あり、亦心より出づる謙遜あり、贖罪の確信あり、而して兄弟に對する全生涯の犠牲あるを發見するを得べし、又基督の十字架を負へる無數の兄弟ありて、彼等は「イタリヤ、オーストリア」に依りて獨立なる宗教的生命を燃したるが、其火は獨特の火焰を揚げたりき、福音の力は流石の教會組織も之を壓伏するを得ず、教會が加へたる恐ろしき重荷の下に福音は屢々其勢力を現はし、今日も尙教會の麵酵となれるなり、教會は屢々不道徳を行ひたるに係らず、中世紀の大神學者に由て福音を人世諸種の關係に應用し、有



益なる効果を收め、或は基督教倫理を造りたるが如きは何人か承認せざるを得んや。教會は此點及び其他の點に於て福音の思想を抱持したる事、管に川流が金塊を運ぶが如くなりしのみならず、善く福音と結合し、福音の力に依りて自ら發達したる事を表はせり、「法王は神聖あり過を爲す者に非ず」との思想、聖徒等を崇拜する羅馬教的多神教、盲目的服従と愚昧なる熱心、凡て此等の者は信徒の靈的生命を窒息せしめたるが如きも、尙教會の中には福音其者より出でたるが如き信徒もありき。即ち敬虔にして愛に富み、神に由る喜悅と平和とに満てる信徒ありき、終りに之を言はん、福音が政治的形式と結合したる事は、其自身に於て必ずしも有害なりしに非ず。彼メラニヒトンが法王にして若し福音を純粹に宣傳する事をさへ許さんには余は法王の存在を承認すべしと曰ひしは彼が法王に内通せし事を示す者に非ず。此結合の有害なりし點は教會が政治的要素を神聖視したる事、及び教會が特別なる歴史上の關係より、一時は有益にして後却て妨害を爲すに至れる者を排斥する能はざりし事なりとす。

是に於て吾人は最後の項目に入る。

新教に於ける基督教

プロテスタント

「嗚呼何たる衰頹不<sup>レ</sup>や」とは新教、殊に獨逸に於ける新教の外観を一見したる者の均しく叫ぶ所なるべし。されど苟くも歐洲の歴史、殊に二世紀より今日に至るまでの歴史を知る者は、千七百年の歴史中最も大にして又最も多くの實を結べる運動は、十六世紀に起りたる宗教改革なりし事を否定する能はざるべし。十九世紀に移らんとせし時代の革新も之には及ばざるなり。如何に十九世紀には發見、發明及び外形的文明の誇るべきあるも、現今三千萬の獨逸人、其他地球上幾億萬の基督教徒が僧侶もなく、捧物もなく、惠の切賣もなく、又儀式をも有せざる一個の宗教を有せりとの驚くべき事實に對しては全く顔色なかるべし。是れ、即ち靈的宗教にてあるなり。

新教を了解せんと欲せば第一に加特力教と相反對せる點に注目すべきなり。吾人は今之を觀察するに二の方向より試みんとす、即ち一方には宗教改革として他方には宗教革命として之を觀察すべし。新教は救の教理に關しては改革にして、教會と其主權及び組織に關しては革命なりき。新教は一朝忽焉として現れ出でし自生



的生産物に非して、プロテスタントなる名稱の示す如く、加特力教會の非道なる最  
早忍ぶべからざるに至りて奮然蹶起せし者たり而して、彼中古時代に於ける微弱  
なる長き宗教改革運動の終局なりとす。斯の如く歴史上の位置より言へば新教は  
過去を繼續せし者に外ならざれば新教は新宗教に非ずして唯だ復興したる宗教  
なりとの新教の持論は一層有力なる者と爲るべし。然れども教會と其主權に對し  
ては、新教は疑もなく一個の革命にてありき。故に吾人は此二の關係に付て新教を  
觀察せんとするなり。

第一、宗教改革——新教は宗教の眞髓即ち救の教に關しては改革即ち再興なりき。  
殊に次の三點に於て其然るを見る。

(甲)新教が福音及び之に基ける宗教的經驗を中心問題となし、以て異分子を排斥し  
たる點に於て基督教は再興せるなり。是に於て宗教は「宗教」なる名稱を戴ける。大  
組織の内より脱出しぬ。此組織の中には福音は「聖き水」と並び用ゐられ、信徒は皆直  
接に神を拜すべしと教えらるゝも、教會の首坐には法王のあるあり。一方には救主  
なる基督を尊崇すれども、他方には聖アンナを崇拜せり。今や宗教は斯かる組織を

離れて本來の状態に歸り神の言葉と信仰とを重んずるに至りぬ。新教は此眞理を  
以て宗教の眞偽を定むるの標準とは爲しぬ。凡そ宗教史上眞乎重要な改革は、第  
一に斯かる本義に還元するを常とす。何となれば宗教は歴史的發達の路すがら、時  
勢に適合せんが爲め多くの異分子を採用し、之と合して無數の雜種の、偽聖經的要  
素を産出し、必要上之に聖なる保護を與ふるに至る者なればあり。斯かる事情の下  
にも幸にして暴舉に出づる者なく、或は己が枯葉の中において終に枯死する程に  
も至らざる時は、茲に宗教改革者なる者出で來りて宗教を潔め、之をして其本領に  
歸らしむべきなり。斯の如き宗教的還元は實に十六世紀に於てマルチン・ルーテル  
が完成したる所なり。彼は意氣頗る昂り宣言して曰ふ、基督教は唯だ神の言葉と之  
に基ける靈的經驗にのみ存在する者なりと。

(乙)第二は「神の言葉」及び「經驗」に關して一定の了解を有する事なり。ルーテルの所  
謂神の言葉は教會の教理に非ず、將た聖書に非ず、唯だ基督に由れる神の恩恵を宣  
傳する事にてありき。而して此恩恵は罪の中に絶望せる人を慰め、之に幸福を與ふ  
る者にして、謂ふ所の經驗とは此恩恵を確信する事なりき。ルーテルは一言を以て  
之を悉すを得べしと思へり。曰く恩恵の神を持てる事を安心して信する事是なり



と。ルーテルが自ら経験し又教ゆる所に依れば、此信仰に由りて心中の不和を消滅せしめ、有らゆる悪の壓制を平らげ、罪の苦感を抜き去り、己が爲す所は缺損多くとも尙聖なる神と結んで離れざるなりとの確信を有するを得べきなり。

いと氣高く、また聖き

神は我父、我友ぞ、

如何なる時も我右に

立ちて予我を護るなる。

狂ふ嵐も荒波も

此世の憂も煩も

其一聲に鎮まるを

我今知りて信すなり、

聲を限りに稱ふなり。

ルーテルは以爲へらく、吾人は基督に依りて和々を得たる慈愛の神の外には何物をも宣傳すべからず。狂喜も幻視も過激なる感情も何の用をか爲さん。吾人は唯だ信仰の目を覺すべきなり。然り、信仰は宗教心の始なり、中間なり、終なりと。而して信

仰と言葉の一致せる所に於て、人は義とせらるべきが故に宗教改革が宣傳せる第一義は人の義とせらるゝ事なりき。而して其意味は基督に依りて神に於ける平和と自由を得る事世に勝つ事及び靈の永遠なる事に外ならず。

(丙) 終りに此改革は個人的及び團體的禮拜の上に大なる變化を與へたりき。茲に至つて禮拜とは信仰を事實の上に證明する事に外なる能はず、又此外なる可らざりしと明かなり。「神は信仰の外何物をも求め給はず。彼は唯だ我等の信仰に由りてのみ我等と交通せん事を欲し給へり」とはルーテルが幾回となく繰返したる言葉なりき。吾人は神を神として尊崇し又彼を父と呼ぶ事によりてのみ神に事ふるを得べく、之を外にしては凡ての禮拜も迷妄にして、神に對する凡ての關係も無効なりと教えらる。嗚呼、此改革の爲に、苦悶的、空想的、努力の消滅したる者如何に多く、又之が爲に、公共禮拜が受けたる變化の何ぞ較著なるや。而して個人的禮拜に付て曰ふべき事は同じく團體的禮拜に付ても曰ふを得べし。即ち團體的禮拜に大切なる者は同じく神の言葉と祈禱とのみにて他は凡て用なしとせられたりき。神に事ふる團體は感謝と讚美とを以て神を宣傳し其聖名を呼ぶべき者にて、夫より以上は凡て神に事ふるの道にあらずとせらる。



改革の主眼は此三點に歸するなり。余輩は之を改革と云ふ。何とあれば假令新教固有の色をこそ帯びざれ、此運動は基督教をして其起原に復歸せしめたるのみならず、其主義は已に西部加特力教の塵灰の中にも認むるを得べかりしが故なり。尙二の言ふべき事あり、余輩は今宗教改革者が禮拜的團體は神の言葉の宣傳と祈禱とを以て神に事ふべき者ありと主張せしを見たるが、彼等は尙加へて曰ふ、教會は神の言葉を正當に教ゆる所の信仰の團體たる事の外、何等の目標をも有すべからずと。余輩は今聖禮典を言はざるべし、何となればルーテルの思想によれば聖禮典は全く神の言葉に基ける者なればなり。若し禮拜の特色は果して神の言葉と信仰とに外ならずとせば、宗教改革を以て有形の教會を打破して之に代ふるに無形の教會を以てしたる者と爲すは一見正當なるが如しと雖も、未だ以て正鵠を得たる者と爲す能はざるなり。抑々教會の有形と無形とを別つに至れるは其淵源既に中古時代即ちオーガスタン時代にあり、即ち眞の教會を「豫定されし人數」なりと定義せし人等は斯かる教會を以て全然無形の者と爲さざるを得ざりき。されど獨逸の改革者等は斯の如き定義を下さざりき。彼等は教會が神の言葉を正しく宣傳する所の信仰の團體なることを公言し、以て教會の劣等なる特色を排斥し、感覺的、有形

的要素を放逐せしなり。然れども誰か學術研究を目的とせる青年の團體又は愛國者の團體が目にて見るべく指にて數ふべき特色を有せざればとて、之を無形の團體と稱する者あらんや、福音的教會に於けるも亦然り。素より福音的教會は靈の團體なり。隨て其有形性も種々なる階段と強度とを有せり。即ち其内には全然吾人の見る能はざる要素あると同時に、強き感覺的勢力として現はるゝ者もあるなり。斯く曰ふもヴェニス共和國或は佛蘭西王國ほど有形的ならざるは勿論なれど、——加特力教の一大獨斷家は其教會を以て之に劣らぬ有形的團體と爲せり。——新教徒たる吾人は兎に角、無形の教會に屬する者に非ずして、靈の力を與ふる所の靈の教會に屬する者なり。此教會や假令地上にあるも尙能く永遠に達する者たるなり。次に新教は主張して曰ふ、基督教會の客觀的基礎は唯だ福音あるのみ、而して福音は聖書の中に含まると。然るに始より既に此思想に反對する者ありき。曰く若し果して斯の如くならんには、若し又福音の眞義を如何に定むべきや、聖書に基きて之を確定するには如何なる方法に由るべきやとの問題を解決すべき主權の承認せられざらんには、茲に一大混雜を生せざらんや、然り新教の歴史は既に其實例に富めるなり。若し福音を正當に了解するの權利を有する者は各個人にして、各個人は



傳説に由らず、會議に由らず、法王に由らずして自由に討究するの權利を有すとせば、何に由りてか統一の團體の成立を望むを得んや、一言すれば教會なるものは到底成立する能はざるべく、終には國家の干涉若くは任意の制限を要するに至るべしと、素より斯の如くして、かのサンクトムオウツキシム聖廳と稱せしインクワジチオン糾問所味して之を處罰する所の法庭を有する如き教會は起らざるべく、又一の團體に向つて内部より外形的制限を加ふるが如きとあるべき筈なし。若し夫れ國家が爲したる事、或は歴史上の必要に逼まられて爲したる事の如きは本問題の關する所に非ざるなり。斯かる事情の下に成立せし組織を「教會」と呼ぶは福音の立場より見れば不當の名稱と曰はざるべからず。是に於てか問題は解決せられぬ。曰く新教の見る所に由れば福音は單純、神聖、眞に人間的にして、説明を待たずとも容易に了解するを得べく、且大體に於て各人に同様な經驗と確信とを與ふる者なりと。或は之に由りて自ら欺く事もあらん、或は人の性質と教育とに由り甚だ異なる結果を生ずる事もあらん。然れども今日に至るまで未だ曾て之が爲に耻を來せし事あるを聞かざるなり。宗教の精髓を信じ、そが日常萬般の生活に應用さるべき者なる事を信ずる福音的、靈的團體は斯の如くして成立し、以て其勢力を現はしぬ。此團體は獨逸其他各國に於ける新教徒即ち、

ルuter派、カルビン派其他の各宗派に屬する基督教徒を包括せり、而して苟くも眞面目なる基督教徒たる限は此等各信徒に共通の點の存するあり、此共通點こそ實に無限の價値の存する所なれ、此共通點あればこそ吾人は福音を抱持し、以て現今の異教に陥らず、又加特力教に退歩する事なきを得るなれ。既に足りぬ、吾人は之より多くを要せざるなり。否此以上の束縛は吾人の拒絕せんとする所あり、彼共通點の如きも實は束縛に非ずして唯だ吾人自由の條件たるのみ。人若し吾人新教徒に向て「汝等は互に分離せり、何ぞ其首領と教理の多きや」と曰ふ者あらば、吾人は之に應じて曰はんとす、「誠に其言の如し、されど吾人は此はか願ふ所を知らざるなり。否吾人は言語と教理とに於て寧ろ之よりも多くの自由と獨立とを希ふ者なり。歴史上の必要に應じて國家的教會或は自由教會を組織する事は吾人に向て餘りに多くの制限と規則とを與へたり、假令之を以て神聖なる制度かりと教えたるには非ざるも、吾人は福音が有する靈の力と統一力とを一層深く信ずるの必要あり。何となれば福音は吾人が後見者を有するよりも寧ろ自由なる靈的戰爭を爲すに由りて其力を現はせばなり。吾人は自ら一個の靈的王國たらんと欲す、而して埃及人の肉壺に於けるが如き迷信に立歸るとを欲せず、素より吾人は秩序の爲め、



教育の爲め有形的教會の必要を認むる者なり。否若し斯かる教會にして善く其目的に適ひ、生長すべき價を有する者ならんには、吾人は其發達を喜ぶ者あり。されど吾人は己が心情までも之に托する能はざるなり。何とあれば斯かる教會は政治的社會的事情の爲に變遷する者にて、今日の教會は復た明日の教會に非ざればあり。靈の教會に入らずして唯だ目に見ゆる教會のみを有する者は、教會あつて實は教會なき者と曰ふを得べし。我等の教會は此處にあり彼處にありと曰ふべき者に非ずして希臘人たるど羅馬人たるどを問はず。到る所に其會員を有する所の信仰の團體にてあるあり。是れ即ち吾人が爲す所の答辯なりとす。此答辯や實に吾人に與へられたる自由が語る所の聲にてあるなり。是に於て議論は再び新教の重要な特色に歸らんとす。

第二、宗教革命——新教は一の改革たりしのみならず又一の革命にてありき。法律的に觀察すればルーテルが反對せし教會組織は吾人の絶對的服従を要求せる者にて、殊に西部歐洲にありては國家の法律と同一の權力を有する者なりき。ルーテルが法王の破門狀を火中に投せしは疑もなく彼の革命的行爲を現はす者と曰ふ

べし。而かも其革命たるや道德的秩序としての法律制度に對する革命に非ずして、當時存在せし所の法律制度に對する烈しき革命たりしのみ。然り新運動は斯の如き者に反抗して起れるなり。斯くて言葉と行とに由り、そが反抗したる點は要するに次の如くなりき。

(甲)新運動は教主政治と僧侶とを有する全教會組織に反抗し、之を破滅せん事を欲せり。而して之を破滅するや各信徒をして自ら僧侶たらしめ、又教會をして自ら制度を造らしめんが爲なりき。其要求の範圍如何、そが在來の事情を變更せし程度如何等の問題は數言の能く説明し得る所に非ず。又福音的教會は如何なる制度を新設せしやに付ても今茲に答ふるの違なし。斯の如きは主要の問題に非ざるなり。主要の問題は教會の聖權の破滅せられし事なりとす。

(乙)新運動は宗教に於ける一切の形式的、有形的、主權に反抗せり。所謂形式的、有形的、主權とは曰く會議の主權、曰く僧侶の主權、曰く一切の傳説の主權是なり。されど新教が主權として承認せし所の者唯だ一あり。自由を與ふる靈に由れる主權、即ち宗教の眞髓たる福音是なり。ルーテルは又聖書の言句の主權に反對せり。然れども此點に關してはルーテルを始め其他の改革者の思想は未だ明瞭ならざる所ありき。



されば彼等は之に關して根本的見解上必要なる結論をも引く事をせざりき。

(丙) 新運動は凡ての傳說的禮拜制度、儀式主義及び所謂「聖行」なる者に反對せり。既に言へるが如く新教は一定の禮拜式や物質的供物や、或は供養や、其他祝福の爲にとて神に向ひて爲さるゝ一切の動作を否認し、全然之を容るゝ能はざりしが故に、華美なる裝飾と、全聖或は半聖の事項と、身振と行列とを有せし傳來の禮拜は悉く地に落ちざるを得ざりき。若し夫れ美學上、教育學上の立場より斯かる形式が如何程の價值を有するやとの問題の如きは第二位に下るべき問題ありとす。

(丁) 新運動は聖禮典主義に反對せり。只だ洗禮と晩餐の二禮典のみは既に初代教會の制規にして隨て基督の定め給ひし者なりとして之を保存せり。されど此二禮典を是認するに至りしも、唯だ一には基督教徒たるを示す記號として、一には全く赦罪の教より來れる動作として人に受けられんが爲なりき。其他の聖禮典は一切之を拒絶したりき。又神の恩恵と祐助とを切賣品の如く心得之を以て特殊の物體と秘密の關係を有せりと爲す所の思想をも拒絶したりき。斯くて聖禮典の代りに神の言葉を置き、断片的恩恵の代りに恵は唯だ一にて之を與ふる者は即ち神なりとの確信を置きたりき。事の茲に到りしはルーテルが其著「バビロンの捕虜」に於て

聖禮典主義を悉く排斥せし程に其智識の進歩し居たるが故に非ずして(彼にも亦迷信ありて往々途方もなき斷定を爲せしとあり)靈魂に生ける神を與へざる所の「恩恵」は凡て虚偽なるを己が内部の經驗に由りて知りたるが故なりき。さればルーテルの眼より見れば聖禮典の教理は一方には神の威嚴を傷け、他方には靈魂を奴隸と爲す者にてありき。

(戊) 新運動は二種の道德を區別するに反對せり。隨つて彼の「高等道德」なる者に反對し、又神が人間に賦與したる能力を使用せざるを以て殊に神意を悦ばすことと爲す思想に反對せり。宗教改革者等は「此世は慾と共に過ぎ往くべし」の強き感覺を有したりき。ルーテルは彼欣然として世に立てる今の基督教徒と同一視すべきに非ず。彼は寧ろ中古時代の人物の如く此世界を以て「涙の谷」と爲し、之より解脱せんことを渴望せし人なりき。然れども同時に彼は神に向ひては信仰以外に何をも捧ぐるを得ず、又捧ぐ可らずと確信せしが故に、世界に對する基督教徒の態度に關しては、彼は敬虔ある遁僧等が既往數百年間その標準とせし者と異なる標準を有したりき。斷食と遁世とは神の前に價なきが故に、又同胞に益を與ふる者に非ざるが故に、而して神は萬物の創造者なるが故に、吾人は神の定め給ひし地位に留まるに若



かすとは實にルーターの感想なりき。此感想あつて始めて此世の制度を樂み、又之を信任するを得たるなり。此感想あつて始めて己が遁世的情操と戰ひて之を征服するを得たるなり。彼は終局の斷案を下して曰く夫婦、主權者等より下りて僕婢に至る迄、有らゆる人間の地位は神の善しとし給ふ所にて、隨て何れの地位も靈的意義を有し、人は各自の地位に由りて神に仕ふべき者なりと。されば忠なる下婢は瞑想三昧に入れる遁僧にも優れるなり。凡そ基督教徒たる者は多くの方法手段によりて己が途を尋ねべきに非ず、唯だ定められたる地位に於て忍耐と愛隣とを示すべきなり。是に於てルーターの念頭に浮べるは、世俗的制度と其應用の範圍とは獨立の權利を有する者なりとの思想なりき。即ち世俗的制度は唯だ教會が之を寛容して之に存在の權利を與へたる者に非ずして、己が獨立の權利を有し、基督教徒が其信仰と愛とを實驗すべき一大範圍たるなり。然り福音に於ける神の啓示を未だ知らざる所にも斯かる制度は尙尊敬すべき者として存するなり。

斯の如く個人的感情より曰へば世より何者をも望まず、唯だ永遠の靈のみ尊重せし彼ルーターは人類を遁世的生活より救ひ出したるなり。彼は之に由りて新時代の生活の基礎を定めたり。彼は再び人類をして遁世的繫縛を脱せしめ、良心に隨

て此世の勤勞に従事するを得せしめたり。而して此果實がルーターの頭上に落ちたるは、彼が宗教を俗化したるが故に非ずして、彼が本問題を考ふるに嚴肅と莊重を以てし、一方には宗教を以て萬事を一貫すべき者と爲し、他方には此世の有形的關係より超然たるべき者と爲したるが故なり。

## 第十六回

人屢々吾人に問ふて曰く、宗教改革は果して獨逸精神の事業ありしや、又如何程まで然りしやと。余は今此複雑なる問題に答ふるを得ざれども、唯だ確かある事實と認むべきは、ルーターの宗教的經驗は其要點に於て獨逸の團體と關係を有せざりしも、彼が獨逸國民に與へたる積極的結果に至つては、彼が獨逸人たる事を證明する事是あり、即ち獨逸人としての彼は獨逸の歴史を造れるあり。傳來の基督教が漸く獨逸に於て趣味を感せられんとせし時より、——此事たるや十三世紀より始まりぬ。——獨逸人等は既に改革の準備を爲せり。若し東部の基督教を希臘教と呼び、西部の基督教を羅馬教と呼ぶを得べしとせば、吾人は改革的基督教を呼んで獨逸教と曰ふを得べし。然り佛蘭西にもカルビンなる改革者ありき。されど彼はルーター



の弟子に外ならず、且つ其勢力ある事業も羅馬人の間に行はれずして、英國人、蘇國人及び和蘭人の間に行はれたるのみ、獨り獨逸人は改革事業に由りて一般の教會歴史の上に新紀元を造るを得たり、是れ「スラブ」人に於ては到底見る能はざる所なり、曰く遁世主義を避くる事、元來遁世主義は他の諸國民に於けるが如く、獨逸人の心を誘ふと能はざりき、曰く有形的主權としての宗教に反抗する事、是れ吾人がポロの福音に於て了解するを得るが如く、獨逸的精神に於ても了解するを得る所なり、或は説教に於ける熱心と至誠、或は議論に於ける自由の精神、皆是れ獨逸國民がルーテルに由りて己が心の秘密を發かるゝが如く感ずる所なり。

吾人は既に前回に於てルーテルが手痛く反抗せし主要の點を語れり、此外尙曰ふべきと多し、例へば彼が改革運動の劈頭に於て一切の獨斷的用語に反對し、其公式と教理の言句を論駁せしが如きはなり、全體彼が斯の如く反抗的態度を執るに至りし所以は、基督教を挽回して僧侶なく、犠牲なく、有形的主權なく、律法なく、神聖なる儀式なく、此世と彼世を結合する連鎖なき所の純然たる宗教と爲さんが爲なりき、之に由りて宗教改革は基督教をして十一世紀以前と曰はず、四世紀以前と曰は

ず、將た二世紀以前と曰はず、實に基督教の始源に復歸せしめたるなり、終には知らず、識らず使徒時代に成立せし形式をも變造又は廢止するに至りぬ、例へば戒律に關しては斷食を組織に關しては監督と執事を、而して教理に關しては千年説（千年一新すべしとの説）を排斥したるが如きはなり。

斯の如く改革と革命とに由りて現出せし新宗教は全體として福音と如何なる關係を有するや、吾人は之に答へて前回掲げたる四箇の要點に於て、新教は福音に復歸せる者なりと曰ふを得べし、所謂四箇の要點とは宗教の内部的、靈的なること、神は慈惠の神なりとの根本的思想、神を拜するに靈と眞とを以てすべきこと、及び教會は即ち信仰の團體なりとの觀念是なり、余は今一々之を詳説するの必要ありや、或は十六世紀、十九世紀に於ける基督教徒は第一世紀の基督教徒の如くならざればとて此確信を誤謬なりと斷定すべきか、兎に角、教會の内部的、個人的なるとが福音の特色と相一致せるは事實なり、義とせらるゝ事に關するルーテルの教が大體に於てポロの思想と相同きのみならず、二者の間常に相異なる所あれども、其目的に至つては全然基督の教訓と一致せるとも事實なり、又神を父なりと知ると、慈惠の神を



有すると、神の攝理と恩寵とに由りて慰安を受くると、及び罪の赦を信する事等は、何れも兩者共通の眼目點たるなり。若しルーテル派の正統教理が難關に苦める時、パウエル、ゲルハルトなる詩人が「神若し我の神なりせば、其餘の事を我は憂へじ」と曰ひ、又「汝の生涯を神に任かせよ」と歌ひしを思はば、福音に對する根本的信仰が如何に新教の精神を一貫せしやを知るに足らん。又眞正の禮拜は讚美と祈禱を以て神を承認するにありと爲し、且隣人を愛するとも禮拜の一部なりと爲すが如きは、直接に福音より來り、又福音と一致せるポーロの教より出でたる者なり。終りに眞正の教會は聖靈と信仰とに由りて維持せらるゝ兄弟姉妹の靈的團體なりとの確信も亦福音と同一線上にある者にて、ポーロが極めて明白に語れる所たり。されば宗教改革は凡て此等諸點を恢復し、基督を唯一の贖罪者と承認せし限に於て、嚴密に福音的と言ふを得べし。苟くも此確信にして凡ての難題と重荷の下に、尙依然として新教々會に於ける重要な地位を占むる間は、吾人は宗教改革を呼んで福音的と謂ふとの極めて正當なるを感ずる者なり。

然るに宗教改革にもまた暗黒の半面あるを免かれざりき。若し改革運動は如何なる價を拂ひしや、其主義精神は如何なる度まで貫徹せられしやと問はば、吾人は明かに此暗黒面を知るを得べし。

第一、吾人は歴史上無代價にて何者をも受くる能はず、殊に激烈なる運動に對しては二倍を拂はざるべからず。然らば宗教改革の爲に吾人は如何なる價を拂ひしや。余は改革が唯だ西歐の一地方にのみ限られしが故に西歐文明の統一を破壊せる者なりと曰ふを欲せず。何となれば之に由りて生ずる發達の多面なる事と自由なる事とは吾人の爲に大なる利益たりしが故なり。然るに新教會を國教會として設立するの必要は終に莫大なる不利益を醸すに至りぬ。素より羅馬教會の如き教會的國家に勝れるは萬々にして、熱心ある羅馬教徒が自ら國教會に比して大に誇れるが如きは誠に謂れなき事なりとす。然れども國教會は幾多の困厄に陥れり。是れ教會的主權者と分離せしが爲のみに非ず、其原因已に十五世紀にありき。國教會は實に福音的教會の特色たる責任の感と活動とを弱からしめたり。之に加へて教會は國家の一機關にして國家に準すべき者には非ずやとの無理からぬ疑念を生じたり。一方には此疑念を拒がんが爲め、他方には教會に一層大なる獨立を與へんが爲め、最近數十年の間多くの事業は爲されたるも、尙此方向に向て殊に各個教會



の自由獨立に關しては一層進歩すべき必要あり、教會と國家との關係は壓制的に遮斷すべき者に非ず。何となれば教會は國家に負ふ所少からざればなり。されど吾人は既に發達し來れる教會をして尙益々發達せしめざるべからず。若し夫れ教會組織の多様なるとの如きは何等の害をも與へざるなり。否是れ却て教會組織が絶對的の者に非ずして任意の者なる事を強く吾人に感せしむる者たり。

次に新教は加特力教に反對して宗教の靈的、信仰的なるを絶對的に重んぜざるを得ざりき。然るに一の教理に甚だしく反對せる他の教理を組織するは大なる危険の宿る所たるを常とす。平凡の人は「善業」の無益なると、そが心の爲に危険なるとを聞くも敢て不快を感ぜざるなり。吾人はルーテルが己が事業の結果として生ぜし勝手ある誤解に對して責任を負ふべき者に非ざるを知ると雖も、同時に獨逸の改革教會に於ては始より道義の衰頹と聖き生活の缺乏とに對して、非難の聲ありし事を忘るべからず。若し爾曹我と愛せば我誠を守れ（約十四）との教訓の如きは不都合にも斥けられたるなり。此中心的意義を始て再興したる者を敬虔派と爲す。其時までは「人は行に由りて義とせらるべし」との如特力教的思想に反對して、人間生活の搖錘は之と正反對の方向に走りぬ。然るに宗教なる者は唯だ心の状態にの

み。關。する。に。非。ず。必。ず。之。に。伴。ふ。に。行。を。以。て。せ。ざる。べ。から。ず。即。ち。聖。と。愛。と。を。以。て。活。動。する。所。の。信。仰。なら。ざる。べ。から。ず。若し福音的基督教徒にして耻づる所なからんとを欲せば此點に付て深く學ぶ所なかるべからず。

尙一の之と密接なる關係を有する者あり。即ち改革が通僧制度を消滅せしめざるを得ざりしとは是なり。改革者が通僧等の全生涯を擧げて遁世的と爲すの誓約を建つるを見て突飛なる事と思ひしは正當なり。又改革者が信實以て神の前に世の職業を營むとは精神に於て遁僧制度に等しきのみならず、却て之に勝る者ありと爲せる事も亦正當なり。然るに茲にルーテルが豫見する能はざりし、又彼が欲せざりし所の事情は起りぬ。即ち福音に適ひ隨て基督教の爲に必要な所の遁僧制度をも残らず消滅せしめし事はなり。凡そ如何なる團體にも其目的の爲に全心全力を捧ぐる所の人格あるを要する者なれば、教會にも亦一切の職業と此世界を捨て喜んで同胞の爲に己を犠牲と爲す所の人物なるべからず。是れ其事の高尚なるが故に非ずして、實に之を爲すの必要あるが故、又生ける教會より斯かる動機の出づるは至當の事なるが故なり。然るに新教會は加特力教會に對して執らざるを得ざりし者と同一の態度を以て、斷乎として遁僧制度を拒絶したるなり。吾人は此點に於



て高き價を拂へる者と謂はざるべからず。言ふと勿れ新教の家庭の中には尙純朴なる宗教心の生けるありと。吾人が拂ひたる價は之が爲に減する者に非ざるなり。然るに現世紀に於て此損失を回復せんとする運動の既に着手されし事は吾人の慶賀すべき現象なりとす。例へが新教會が従前の形に於ては其眞價を承認する能はずして遂に排斥せし所の傳道婦制度其他之に似たる諸現象の復興を見るに至れるが如き是なり。然れども此方向に於ける新教の爲すべき發達は前途尙遼遠なるを覺ゆ。

第二、宗教改革は常に高價を拂ひしのみならず、得たる新知識より生ずべき凡ての結果をも豫想する能はず。又其知識を純粹に實行する事をも爲す能はざりき。斯く曰ふも余輩は改革が何れの方面にも全く其功を奏せざりしと曰ふに非ず。如何で斯かる事のあるべき理あらんや。又何人か其然るを願はんや。余輩は唯だ改革當時の意氣込より推せば、今少し高貴なる結果の納めらるべきにと思はるゝ所に、新宗教の遅々として進まざりし事を思ふのみ。之には色々の原因ありしなるべし。一は千五百二十六年以來福音的國教會が頻々として設立せられざるを得ざりしに由るべし。是れ尙流動状態にある幼稚なる教會の多かりし時に當りては、之を固めて

成熟せる教會と爲すの必要ありしが故なり。一は宗教的熱狂者に對する不信用かさなくば今暫く相提携するを得べかりし傾向をも排斥せしめたるに由るべし。ルーテルは彼熱狂者より何者をも得んと欲せず。隨て彼は己の思想が熱狂者と偶然相一致するを見る時は己が思想を疑ふを常とせしが、其苦しき果報は忽ち開明時代の福音的教會の頭上に落ちぬ。吾人はルーテルの誹謗者を以て目せられんことを恐れつゝも、尙一言せざるべからざる事あり。天才ルーテルガポーロの如き強固なる信仰を有し、之に由りて人心に偉大なる感化を與へし事は論を俟たざるも、彼が當時の思想界に於て優等の地位を占めし者に非ざりし事も亦疑を容れず。當時は最早や純朴の世に非ずして思想界は大に活動を始め、隨て宗教は精神的勢力の各方面に關係せざるを得ざるの時なりき。斯かる時代の事なればルーテルは唯だ宗教改革者たるのみならず、同時に思想上の教師、又指導者なるを要したりき。彼は人民の爲に自ら新世界觀と新歴史觀とを造らざるべからざりき。何となれば彼は一人の助力者をも有せず、又人は彼の外何人にも聞かん事を欲せざりければなり、然るに不幸にも彼の學識は尙深からざる者ありしなり。次にルーテルは基督教の本源たる福音に歸らんとを欲したるが、直覺と内部的經驗の許す限に於て彼は其



目的を達したりき、加ふるに彼は歴史的研究に造詣する所ありて、屢々傳說的獨斷の城壁を冒して凱歌を奏せし事もありき、然れども當時に於ては獨斷的教理の歴史に關する明確なる知識を得るは尙ほ不可能の事にて、若し夫れ新約聖書の歴史及び初代基督教の歴史に至りては之を知る事更に困難なる者ありき、斯かる困難の中にもルーテルの達觀と判斷力とが彼の如きを得しは只管ら驚嘆の外なきなり。之を知らんと欲する者はルーテルが手に成れる新約聖書緒論、若しくは「教會と法教師會議」を一讀すべきのみ、然れども多くの問題は彼が未だ夢想だもせざりし所にして之を解釋し得るや否やは扱置き、隨て彼が核と皮とを別ち根本的要素と異分子とを判別する能はざりし者多かりき、されば教理と歴史觀に於て宗教改革の尙未完あるを見、或は改革が未だ問題とも爲らざりし所に思想の混亂あるを見るも何ぞ驚くを要せんや、改革はかの充全なる發育を爲してユピテル神の頭上より生れ出でたりてふパラス、アテーテ神の如くなる能はざるなり、教理上の改革は僅かに其初段に達せしのみにて發達の前途尙甚だ遠き者あり、然るに惜ひ哉、改革は國教會の設立を急ぎたるが爲め、殆ど將來發達の望なきに至れるなり。宗教改革が自ら招きたる混亂と障害とに關しては、唯だ二三の要點を示すのみに

て満足せざる可らず。

(甲)ルーテルが宗教の眼目と爲さんと欲せし者は唯だ福音のみありき、即ち人の良心に自由と束縛とを與ふる所の福音、又僕婢と雖も了解するを得る所の福音のみなりき、然るに彼は他方に三位一體説及び基督の神人兩性説をも福音の一部として承認し——彼は斯かる問題を歴史的に攻究する能はざりき。——或は新教理を構成せしのみならず、教理と福音との間に明快なる區劃を爲す能はざりき、彼が遙かにポーロに及ばざりし所以の者茲にあり、之が重大ある結果として見るべきは知識主義の未だ地に墜ちざる事、新煩鎖的教理が救済の必要條件として成立せしこと、基督教徒の間に二種の階級を見るに至りしこと、即ち一方には教理を了解する者ありて、他方には人の了解せし所に従ふの外なき幼稚なる信徒あるに至りしこと是なり。

(乙)ルーテルの確信せし所に由れば「神の言葉」とは他なし、人に新生命を與ふる所の者なりき、即ち基督に由れる神の自由なる恩寵の宣傳に外ならざりき、ルーテルは其生涯の絶頂に達せし時は聖書の言句の奴隸たるが如きことゝ、能く律法と福音の別を知り、新約と舊約の別を明かにせしのみならず、新約の中に於てすら能く



核皮を別つを得たりき。聖書より輝き出で、人間靈魂に力を與ふる所の根本的事實の外、彼は何をも尊ぶとを欲せざりき。然れども彼は尙圓滿無垢なる能はざりしなり。彼は曾て聖句に關して「聖書に斯く記るされたり」との言句は敢て拘泥するに及ばずと公言せし事をも忘れ、聖句の重要なる者に遇へば忽ち「聖書に斯く記るされたり」と曰ひて斷乎として吾人の服従を促せり。

(丙) 罪の赦は神の恩恵あり。隨て生命と曰ひ、救拯と曰ひ、恩恵の神を確信すると曰ひ、一として神の恩恵ならざるはなしとはルーテルが屢々語りし所なり。且曰く主眼とする所は神の言葉なり。神の言葉あつて始めて人は信仰と無邪氣なる崇敬とに由りて己の靈を神と一致せしむるを得るなり。而して此一致や實に個人的關係に外ならずと、然るに同一のルーテルは恩恵の方法殊に主の晚餐と小兒の洗禮とに關して激論を爲し、彼が高尙なる恩恵説も憐れ再び加特力教の思想に歸らんとし、又眼目は凡て靈的問題にある事及び神の言葉と信仰の前には何物も顔色なしとの根本思想も全く地に倒るゝに至るまで唯だ間一髪を餘すのみなりき。ルーテルは斯の如くして、新教會の爲に禍の遺産を造りたりき。

(丁) 羅馬教會に反對し、其壓制の下に勃然として起りたる「プロテスタント」教會が福

音の再興を以て合理合法の事と爲せしは理なきに非ず。然れども新教會が福音と教理とを混同せし爲め、忽ち次の如き思想は密かに教會内に入り來れり。曰く「新たに造られし各教會は即ち眞正の教會なり」と眞正の教會は即ち信徒の聖なる團體なりとは素よりルーテルが忘れざりし所なるも、之に則りたる有形的教會は如何なる組織を有すべきやとの問題に至りては何等の定見をも有せざりしが故に、後世容易ならぬ誤解を生じ「我教會は即ち眞正の教會なり、何となれば我に正當なる教理あればなり」と曰ふ者あるに至りぬ。是に於てか一方には自ら欺く事と不寛容の精神とを生じ、他方には神學者、牧師と平信徒との忌まはしき階級上の區別をして益々強固ならしめたり。理論は兎も角、事實の上に於ては加特力教會と同じく茲に二重の基督敎を現出する事とはなりぬ。此潮流を支へんとせし敬虔派の努力も其甲斐なく、此區別は今尙依然として亡びざるなり。神學者と牧師とは正統主義の下に立ち、全教理を擁護するの義務を有せしも、平信徒等の義務は二三の要點を確守する事と正統教理を攻撃せざる事との二に過ぎざりき。余此頃之を聞く、有名な某氏は異説を抱ける某神學者に關して斯かる神學者は寧ろ哲學教授とならん事こそ願はしけれと曰へりと。而して其理由に曰く「斯くすれば不信仰なる一の神



學者を失ひて其代りに信仰ある一の哲學者を得たりと曰ふを得べし」と若し教理なる者は福音的教會に於ても永遠の要素にして、假令人を拘束する事あるも平信徒の辯護に委すべからざる程重大なる者なりとせば、某氏の言、素より至當かりと曰はざるべからず。然れども若し此儘にして進まんか、又若し之に加ふるに混亂又混亂を以てせんか、新教も終には憐れむべき第二の加特力教會と成り果てざらんや。余輩は之を憐れむべきと曰ふ、何となれば新教が到底、加特力教に倣ふ能はざる者二あればなり。何ぞや法王と遁僧即ち是なり。聖書の言句も、記號的信條も、加特力教が法王に賦與せし如き絶対的主權を造る能はず、又新教は今更遁世的生活に復歸する能はざるなり。かつ新教には國立教會あり、妻帶せる牧師あることなるが、若し新教にして加特力教會に拮抗せんと欲せば、此二者は加特力教徒の餘り感服せざる所なるべし。

諸君よ余は新教が斯くも不完全と混亂とを以て始まりしにも係はらず、未だ其眞髓を傷なひ、或は之を窒息せしむる程に墮落せざりしを見て、神に感謝せざるを得ざるなり。十六世紀の宗教改革に由りて改革事業は既に完成せりと確信せる人等も、未だ改革の根本思想を棄てんと欲せざりき。隨て凡て眞面目ある福音的基督

教徒の同心共立すべき一大餘地は尙存したりき。然れども若し斯かる人にして神の言葉の眞義に基きて改革事業を繼續する事が實に新教の死活問題なるを看破する能はずば——斯かる繼續は既に福音的同盟に於て盛んに其實を結びぬ。——宜しくルーテルが信仰全盛の日に主張せし所の自由をして大に活動せしむる事に勤むべきなり。即ちルーテルの語に曰く「精神と精神とをして激烈なる衝突を爲さしめよ。之がため方向に迷ふ者あるも、意に介する勿れ。斯の如きは實際の戰鬥に於て免るべからざる所なり。競争あり、戦争ある所に、傷く者倒るゝ者あるは當然の事なり。唯だ忠實に戦ふ者のみ、義の冠を戴くを得べし」と。

福音的教會が一たび加特力教會の風を帯ぶるや、——斯く曰ふも新教が法王を有するに至れりと曰ふに非ず。唯だ律法と教理と儀式の教會となりしを謂へるのみ。茲に由々しき危険の潜伏せるあり。その茲に至れるは斯かる發達を助くる所の三大勢力ありしが故なり。第一は人々の無頓着なりし事なり。凡そ無頓着なる人は宗教を主權傳説、僧侶教主政治及び儀式と同一視する者なり。彼等は宗教の外形的、不進歩的なる僧侶の傲慢とに向つて不平を鳴らし、之に誹謗を加へたと同時に、宗教的感情の生ける發現を嘲り、以て各儀式に服従せり。彼等は全く福音的基



督教を解する能はずして識らずく之を抑壓し却て加特力教を賞揚する者たり。  
 第二は自然宗教とも稱すべき者なり。曰く恐怖と希望の中に立てる者曰く宗教とし  
 曰へば何よりも主權者を求むる者曰く己が責任を遁れ以て二重の保險を得ん  
 とする者曰く心の嚴肅なる時と困難に沈める時とを問はず其生活に向つて何物  
 をか添補せんと欲する者或は宗教を以て美的存在物と爲す者或は之を以て一時  
 の便宜に供せんとする者凡て斯かる人は自ら宗教を加特力教と同一線上に置く  
 者たり彼等が求むる所は固定せる宗教と一切の熱情と助力となり而かも彼等は  
 福音的基督教を希はざるなり若し福音的基督教にして一たび斯かる願望に降伏  
 する事あらんかそは既に加特力教に退化せるなり第三の勢力に付ては余は之を  
 語るを欲せざれどもさればとて之を默過する能はざるなり何ぞや國家是なり抑  
 も國家は宗教と教會を最も保守的なる者として又敬虔と服従と秩序とを維持す  
 る機關として尊崇する者なるがされど此點を以て國家を非難するは當を得たる  
 者に非ず否な國家は實に此目的を以て壓迫を加へ教會に於ける一切の固定的要  
 素を保護し若し教會の統一とそが公共の利益とを危くするが如き運動の起るあ  
 らば直ちに之を鎮壓せんと試むるのみならず更に進んで教會を以て國家の秩序

を維持する所の警察と爲さんと試みたることも在りき吾人或は之をも忍ぶ事を  
 得ん何とあれば國家が勢力の出所を發見する毎に凡て之を利用せんと試むるは  
 必ずしも不當ならざればあり然れども教會を以て一個の道具に過ぎざる者と爲  
 すに至りては斷じて許すべからず若し之をも許さんか教會の本務と威嚴とを破  
 壞するのみならず教會は精神よりも制度を重んじ眞髓よりも形式を重んじ眞理  
 よりも服従を重んずる所の一個の有形的組織と成り果つべきあり。

吾人は以上三種の勢力に反對して福音的基督教の眞面目と自由とを發揮すべき  
 なり是れ神學の獨り能くする所に非ず實に堅牢なる基督教の品性に俟たざるべ  
 からず若し強固なる基礎の上に立たざらんか福音的基督教は唯だ退歩するの外  
 なかるべし若しボーロの定めし自由教會すら其中より加特力教會を出すを得べ  
 いとせば何人か基督教徒の自由精神より湧き出でたる教會も他日加特力教會と  
 爲るの憂なしと斷言するを得んや。  
 然れども福音は決して之が爲に滅ぶる事あかるべし是れ歴史の證明する所たり  
 譬へば深く織り込まれたる赤絲の如く福音は尙かゝる教會の中に發見せらるべ



きなり。斯くて福音は繁雜なる羈絆を破つて何れの所にか其頭角を現はすを得べし。昔に之のみならず外面は美にして内面は腐朽せる希臘教會や羅馬教會の内にすら福音の火は尙消えざり。汝進みて見よ堂奥深き所に祭壇あり聖なる永遠の燈火の燃ゆるあり。福音は希臘哲學及び希臘の神秘的禮拜と結合せしも未だ其内に滅びざるを得たり。福音は又羅馬帝國と密着せしも未だ其本領を失はざるを得たり。否々茲に止まらず。宗教改革は實に羅馬教會の内より起りしなり。其獨斷的教理と禮拜の制度とは既に變化し、福音は無學なる民と大思想家とを問はず、深く人心に徹するを得、フランシクスやニウトンの如き人も深く之を尊重したりき。福音は世界觀の變遷の爲に動搖さるゝ事なく、曾て神聖視せられたる思想と形式をも衣の如く脱ぎ去りぬ。又全文明の進歩に加担し、自ら靈化して人間歴史の進路に向つて、そが道德の原理を確實に應用するを得たり。斯くて何れの時代を問はず、福音固有の眞面目と慰安とに接して心の重荷を卸るし、凡ての羈絆を脱せし者實に幾千なるを知らざるなり。若し吾人にして福音とは即ち父なる神を知り之を承認すること、贖罪を確信すること、謙遜なること、神を悦ぶと、活動の力あると、並に兄弟を愛する事なりと曰ふを得ば、若し又教訓の爲に其祖師を忘れず、祖師の爲に其

教訓を忘れざるは基督教に於ける要點なりとせば、歴史は福音の勢力未だ地に墜ちず、尙永遠に發現するを得る者なる事を確證する者たり。

是に至りて諸君の中には或は余が現今吾人が有する一切の世界的知識と福音との關係、一言すれば吾人現在の立場に付て論ずる所なかりしを物足らず思ふ者あらん。然れども斯かる問題を満足に論じ去るは短少時間の能くする所に非ざるなり。されど本問題の眞髓に關しては余は既に曰ふべき事を悉したり。何となれば吾人は基督教の歴史に於ては宗教改革以後何の新らしき者をも經驗せざればなり。世界的知識は素より驚くべき進化を爲しぬ。宗教改革以後、一世紀は一世紀より進歩し、殊に最近二世紀に於ては最も重大なる進歩を爲しぬ。然れども宗教と倫理の眼より見れば、宗教改革の勢力と主義とは未だ老朽せざるなり。吾人は唯だ有りの儘に之を執へ大胆に之を應用すべきのみ。現今の學術は之に向つて、毫も新難題を持ちかけざるなり。若し夫れ福音的宗教の上に懸かれる實際的難題の如きは、いづも變らぬ古き難題にてあるなり。斯かる難題に關しては吾人は何等の證明をも與ふる能はず、何となれば此種の證明は要するに吾人の信仰の變形に外ならざれば



なり。然るに歴史の進行に連れて、基督教的同胞の念は前代未聞の方向に開展し、新たに一大版圖を造るに至り、社會的方面即ち是なり。此方面には吾人の成すべき大事業の横はるあり。此事業にして益々成功せば人間最深の問題即ち人生の意義に關する問題は愈々満足なる解答を得べきあり。

三首

諸君よ、宗教即ち神と人とを愛する事は人生に一定の意義を與ふる者なるが、是れ科學の爲す能はざる所なり。余や此宗教の内に眞面目に生活せしこと既に三十年、又以て得たる所の経験を語るに足らんか。純粹なる科學は吾素より之を尊ぶ。科學を輕んじ之に冷淡なる者は禍なる哉。然れども何處より「何處に」又「何の爲に」等の問題に關して科學が爲し得る解答は二三十年の昔に勝れる者あらず。科學は能く事實を教え、矛盾を發き、諸現象の關係を明かにし、感覺と觀念の誤謬を正すべし。然れども世界の進行と人生の進路は何處より又如何にして始まりしや、科學は唯だ其一端を示すを得るのみ。又何處に向つて往くべき者なるや。斯かる問題に向つて科學は何をも教ゆる能はざるあり。然れども吾人若し人間最高の善として、又吾人の本質として、靈的生活の絶頂に輝ける勢力と眞價とを承認せば、若し之を貴んで

大なる實在と爲し、莊重と勇氣とを以て己が生活を之に準せんとせば、而して若し人類の歴史を達觀し、其向上的發達を觀察し、熱心忠實以て其中に靈の教會あるを發見せば、吾人は退屈と絶望とに沈むことなく、耶蘇基督が父と呼びし神、又我等の父にてある神を確知するを得べきなり。

### 基督教の眞髓



24/1/38



